

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

「オンラインによるロシア・ 中央アジア映画上映会」

第1～3回上映会 報告書



2022年9月





「オンラインによるロシア・中央アジア映画上映会」報告書の刊行に寄せて

白山 利信

筑波大学人文社会系教授・国際公共政策学位プログラムリーダー・
NipCAプロジェクト実務責任者

今年度で4年目を迎えた筑波大学「日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」は、2019年1月、文部科学省「大学の世界展開力強化事業(ロシア)」の本学の採択事業「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」(2014-2019)の成果とノウハウを引き継ぎ、新たなミッション(中央アジア及びアゼルバイジャンを中心とした中央ユーラシア地域のSDGsの達成と当該地域社会の課題解決に貢献できる人材の育成)を担ってスタートしました。2020年春、新型コロナウイルスのパンデミックによって計画のすべてが変更を余儀なくされましたが、活動形態をオンラインに切り替えることで、プロジェクト活動を拡大しつつ推進してきました。

NipCAプロジェクトでは公開講演会「中央ユーラシアと日本の未来」シリーズや連続講演会Special Lecture and Discussion "Central Eurasian Studies in East Asia and Beyond"シリーズなど、さまざまなイベントを開催しています。「オンラインによるロシア・中央アジア映画上映会」は中央アジアの文化とSDGsへの理解を深めるため、プロジェクト2年目から開始しました。商業ベースにのらない日本未公開の、しかし芸術的に優れたロシア・中央アジア映画に字幕をつけて上映し、作品背景や舞台となる地域についての解説も合わせて行っています。これまですべての上映会において定員500名を超える参加申し込みがあり、NipCAプロジェクトでももっとも注目度の高いイベントになっています。上映会直後より、解説に使用した資料を共有してほしいとの問い合わせを毎回いただいております。上映後に実施したアンケート結果とともにまとめて刊行することにいたしました。

本冊子に収められているのは、第1～3回の上映会の記録です。第1回では、ロシアで働くタジク人移民労働者を描いたラリーサ・サディロワの『マヤ』(2013)を上映しました。ロシアで働く中央アジアからの移民労働者たちが劣悪な環境下で働き、さらに主人公のマヤは女性であるために、より過酷な境遇に置かれていました。タジク人のパートナーを持つロシア人女性監督によって撮られたこの作品は、ロシアにおけるタジク人コミュニティの内側を観客に提示し、移民労働・女性労働について深く考えさせる作品でした。第2回では、シャフルバヌ・サダトの『カブールの孤児院』(2019)を上映しました。上映会が開催された2021年8月は、ちょうど米軍がアフガニスタンから撤退し、タリバンが勢力を伸ばす最中での開催だったこともあり、多くの注目を集めた上映会でした。映画の舞台となっていたのはソ連軍がアフガニスタンから撤退した1991年ですが、この時もタリバンが瞬く間に首都に進軍し、女性や子どもを中心とする市井の人々が真っ先に苦しむことになりました。舞台となる寄宿学校で子どもたちに提供される食事がすぐさま粗悪になり、女性たちが一斉にスカーフを被るシーンが印象的です。中央アジアと共通する生活文化を見られる箇所もあり、まさに現在進行形で繰り返されている歴史の一端を学ぶことのできる作品でした。第3回上映会では、フィリップ・ユーリエフがユーラシア大陸最東端のチュコトカ(チュクチ半島)の漁村を舞台に撮った長編第1作『キットボーイ』(2020)を上映しました。1年のほとんどが冬にあたる厳しい自然環境は言うまでもなく、アメリカが目と鼻の先にありながら自由に渡航できず、日常的に発生する停電やインフラが未整備である様子はショッキングな光景でした。7年をかけて撮り上げた、少数民族チュクチの人びとに寄り添った映像からは、日本でほとんど知ることのできないロシア辺境の北東シベリアの人びとへの理解を深めることができ、まさにSDGsの理念に通じる作品でした。

これらの作品を視聴した人の中には地方在住の高校生や海外在住の方もおり、こうした方々に作品をお届けできるのはオンライン上映のメリットです。今後もNipCAプロジェクトでは「オンラインによるロシア・中央アジア映画上映会」を引き続き開催し、順次報告書も刊行していく予定ですので、どうぞご期待ください。

最後になりますが、日頃から筑波大学NipCAプロジェクトを陰に陽に温かく支えて下さっている公益財団法人日本財団の森祐次常務理事、有川孝国際事業部長、国際事業部の沼田雅子氏、そして日本・中央アジア友好財団(JACAFA)のヴルボスキ京子会長に対して、衷心より厚く御礼を申し上げます。

第1回 オンラインによるロシア・中央アジア映画上映会

上映日 2021/2/5 [Fri]



タイトル マヤ

監督 ラリーサ・サディロワ

脚本：ラリーサ・サディロワ、パーヴェル・フィン
 プロデューサー：ルスタム・アハドフ、セルゲイ・ラザルク、カレン・シャフナザーロフ、
 ウラジーミル・リャソフ
 撮影：ドミトリー・ミシン
 出演：ニルファル・ファイジエフ、ナタリア・イサエフ、
 マクスム・アブドゥラエフ、ラフマト・ハイダロフ
 原題：Она
 製作年：2013年
 時間：93分
 製作国：ロシア
 言語：ロシア語、タジク語
 日本語字幕：梶山祐治
 タジク語監修：グロマリエフ・シラリ

現代ロシア映画における中央アジア移民労働者の表象

梶山 祐治

— 映像の中の中央アジア移民労働者

ロシアの街中で、中央アジアからの移民労働者を目にしない日はない。彼らの姿は、現代ロシアの映像文化の中でどのように描かれているのだろうか。複数の作品で描かれた姿を通して、移民労働者への理解を深めることが可能である。

ロシアでは1990年代に極東への中国人移民労働者が急激に増え、2000年代以降に中央アジアからの移民が増加した。2000年代もっとも多かったといわれる移民が、ウズベク人である。それゆえ、ロシアにおける中央アジア移民労働者を扱った映像の中でもっとも早い例の一つとして、2009年にウズベクフィルムで製作されたユスブ・ラズニコフ『ガストアルバイター』（日本未公開¹）があるのはそういった事情による。現代ウズベキスタンを代表する監督であるラズニコフによるこの作品は、ウズベキスタンからロシアへ出稼ぎに行き、音信不通に

なった孫を探しに来た老人を描いている。孫を探す過程で老人に寄り添い親身になって助けるのが、体を売って生計を立てている若いモルドバ人女性である【図1】。周



【図1】

縁に生きる人間の視点からロシアを丁寧に描くとともに、弱者に寄り添うのもまた弱者という残酷な現実の描写にもなっている。

こうしたロシア・中央アジアの移民労働者に関する映画は現在に至るまで日本ではほとんど紹介されていないが、2018年の東京フィルメックスではセルゲイ・ドヴォルツェヴォイの『アイカ²』（2018）が最優秀作品賞を

1 以下、本報告書では日本未公開作品をタイトルの後に（未）と表記して示した。

2 その後、2021年12月に全国6カ所の劇場で開催された中央アジア今昔映画祭でも上映された。

「中央アジア今昔映画祭公式HP」[<https://trenova.jp/centralasia/>] (2022年9月1日確認。以下同じ)。

受賞して話題を集めた【図2】。「モスクワの産院で約

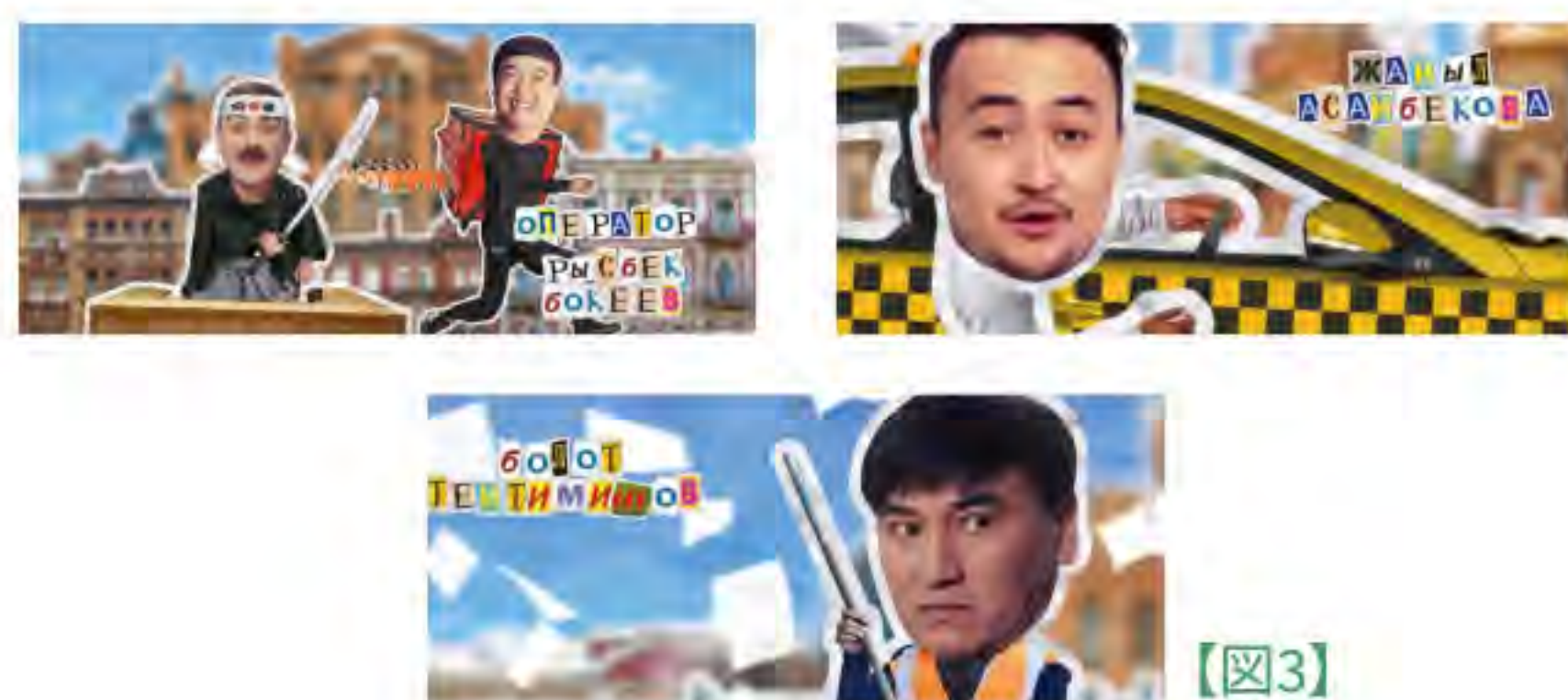


【図2】

250人のキルギス人女性が出産した新生児が放棄された」というショッキングなニュースを見たことが制作の契機となった³という、カザフスタン出身の著名な監督によるこの作品は、タイトルと同名のモスクワで働くキルギス人女性労働者が置かれた過酷な状況を、手持ちカメラで緊張感を持って映し出している。アイカは男に強姦された末に妊娠し、中絶費用を捻出出来なかったため出産を選択するが、まだ出血が止まらないうちから借金返済のため病院を抜け出して仕事を求めて街をさまよう、衝撃的なオープニングで幕を開ける。移民労働者の中でも女性というだけでさらに過酷な環境に置かれてしまう不幸は、第1回上映作品のラリーサ・サディロワ『マヤ』(2013)にも共通している。

— 中央アジア移民労働者を描いた2つのTVドラマ

近年、移民労働者に関する映画は、ロシアでも中央アジアでもますます多く製作されるようになっていく。以下では、特徴的な2つのTV作品を紹介する。1つ目は、近年放送されたTVドラマ、アキム・カラサエフの『移民たち』(2020-21、未)である。ロシアのサンクト・ペテルブルクで出会って親しくなったタクシー運転手のキルギス人と清掃員のタジク人を中心に中央アジア出身移民労働者の生活を描く。このドラマの30秒しかないオープニングには、移民労働者がよく従事している4つの職業が示されている【図3】。日本食レストランの料理人、



【図3】

フードデリバリーサービス、運転手、清掃員で、日本食レストランで働く男性の姿はいかにもステレオタイプに満ちた描写となっている。ドラマの中で主人公は立派な自家用車でドライバーをしており、このドラマは移民たちの実際の生活を描くのではなく、叔父の遺産を受けついで移民が経済的な基盤を持ちながら都会で騒動を巻き起こす、その可笑しさに力点が置かれている。移民労働者の実態に迫るよりも、コメディの特徴としてTVにおいて不特定多数の幅広い視聴者を楽しませることが目的とされている。

カラサエフの『移民たち』とは対照的に、多様で複雑な移民たちの生活を見せしてくれるTV作品がパヴェル・バルディン『サラーム、モスクワ』(2016、未)である。外国人嫌いのロシア人サーニャとダゲスタンのマフィア一家で養子として育った温厚な性格のルスラムがバディとなり、犬猿の仲の2人が仕事を通じてお互いの理解を深めながら、市場を牛耳っている犯罪組織の黒幕を追及していく全16話のドラマである。ドラマでは毎回、様々な移民労働者の姿が描かれている。【図4】で一番右に写っている女性はルスラムの恋人でもあるタジク人女性のグーリャで、画面の左



【図4】

奥に、清掃員である同じタジク人の男性がいる(第4話)。真ん中にあるルームメイトの女性2人はグーリャのルームメイトで、その派手な衣装からも売春婦とわかる格好をしている。グーリャは日本料理店で働き、やがて高度な語学運用能力を見出されて移民局で働くことになるのだが(第6話)、グーリャの兄を知っているというこの男性は、初対面にもかかわらず、売春婦と話している場面を見咎めて、彼女をタジク人の恥だといって罵る。ところがこの男性は明らかに移民とわかるその見た目から誤解を招き無実の罪で投獄され、絶望して自ら命を落とすことになってしまう。こうして『サラーム、モスクワ』は、偏見に満ちた移民

3 「第22回東京フィルメックス『アイカ(原題)』Q&A」[<https://filmex.jp/2021/news/daily-news/ayka>]。なお、最優秀作品賞を受賞したことで大きな話題を集めた『アイカ』は、映画記事で「不法移民女性の過酷な日々を描く」といったふうには不法である点を強調した紹介をされることが多かった(たとえば映画.comの以下の記事を参照:第19回東京フィルメックス最優秀作品は、キルギス人不法移民女性の過酷な日々を描く『アイカ』[<https://eiga.com/news/20181124/12/>])。女性労働者が置かれた境遇よりも労働の不法性に焦点を当てた紹介は、移民労働者への風当たりの強い日本社会の現状を反映しているといえる。

社会の中でも複雑な関係があることを提示していく。

特に、移民たちが置かれている環境の過酷さは丹念に描写されている。移民は口頭による契約だけに基づいて働いているケースが多く、仮に書面の契約があってもその合法性は怪しい場合が多い。【図5】はバザール



【図5】

(市場)で滞在許可証の提示を強引に求める露悪的な警官の描写で(10話)、外ではこうした警官に怯える一方、本来安らげるはずの寝床は狭く不潔で湿っぽく、病気に悩まされることも多い。唯一の福利厚生が無料の住居提供で、それはただ彼らに守衛を兼ねさせるために過ぎないのだ。『サラーム・モスクワ』はロシア語圏からの移民だけでなく、ベトナム人移民労働者も取り上げている。⁴ 左端に時計で時間を測っている男の影が写った【図6】は、「あと5分で食え」と脅されながら、裁縫工場で働くベトナム人労働者が急いで食事をとっている場面である(10話)。口を手で押さえた女性は実は妊娠しているのだが、解雇されることを恐れて、その事実を必死に隠している。労働者たちは食事を味わうことはできず、ただ働くための最低限のエネルギーを補給しているに過ぎない。キルギス人女性労働者を描いた『アイカ』で主人公が置かれていたのと同じ、女性労働者ならではの過酷な現実である。『サラーム・モスクワ』は、グーリヤのルームメイトをはじめ複数の人物が突然姿を消したように登場しなくなるなど、人物処理にドラマによく見られる瑕疵は認められるものの、ロシアの移民社会の過酷さとその中にも階層のある多様性を描いているという点で、屈指の映像作品となっている。



【図6】

— タジク人女性労働者を描く ラリーサ・サディロワ『マヤ』(2013)

ラリーサ・サディロワは、1963年、ウクライナとの国境に近いロシアの都市ブリャンスクに生まれた。ほとんどの監督作で自ら脚本も執筆し、パートナーであるルスタム・アハドフはタジク人とのハーフで、『マヤ』のプロデューサーも務めている。それゆえサディロワは元々タジク人コミュニティに近いところにおり、作品ではもともと端役で中央アジア移民を登場させていた。『マヤ』の



【本人提供】

主人公マヤは、恋人を追ってロシアにやって来るのだが、彼から裏切られてひとり異国の地に取り残される【図7】。このストーリーは監督が聞いた実話に基づいて製作された。ただし、映画では彼女に思いを寄せる少年が最後に寄り添いまだ希望を感じさせる終わり方になっていたのに対し、実際の事件の結末は映画よりも悲劇的なものだったという。また、ブリャンスクにはタジク人コミュニティが存在し、ロシア人とタジク人は良好な関係にあるが、それでもタジク人労働者が置かれている環境はひどいとも語っている。タジキスタンの人たちは、『マヤ』で描かれているようにタジク人労働者が置かれている過酷な環境を知らず、プロデューサーのアハドフがタジキスタンから資金援助を受けようとしたが、移民労働者のテーマは歓迎されないということで不首尾に終わった。⁵



【図7】

『アイカ』が手持ちカメラでアイカに密着してそのプライベートな部分を明るみに出していたのに対して、『マヤ』はマヤの周囲に存在するさまざまなタジク人の姿を映し出している。【図8】は映画の

4 このドラマはベトナム人労働者が多く登場するが、ベトナム人俳優を探すのは難航し、ブリヤート人、トゥバやウズベキスタンの役者が演じ、ベトナム人が吹き替えをした。

«Первый канал покажет криминальную драму "Салам Масква"»

[<https://rg.ru/2017/03/17/pervyj-kanal-pokazhet-kriminalnuiu-dramu-salam-maskva.html>]

5 «НЕУЖЕЛИ НАШИ ТАК ЖИВУТ В РОССИИ?»: Интервью с создательницей фильма о «понаехавших» [<https://newtimes.ru/articles/detail/72944>]

冒頭で、ロシアに到着したばかりのマヤを車で送っている男性は、タジク人出稼ぎ労働者のブローカー的存在のラフマドである。映画の序盤には、男たちが順番に、ラ



【図8】

フマドにお金を渡し、ノートにその金額を書き込んでいるシーンがある【図9】。これはラフマドを通してタジキスタンにいる家族にお金を渡すシステムである。ソ連崩壊して間もない1990年代は、銀行によるタジキスタンへの送金システムが存在せず、またその後も国境で稼いだ金を巻き上げられるケースが多発したため、現金を手渡しで届ける業者が存在した。あるタジク人は、以下のように述べている。

今の銀行と同様に安全な送金を代行してくれる業者がいたんですよ。当時は銀行送金というシステムがなかったんで、私たちはそういう業者のサービスを利用していました。自分で現金を持ち帰ろうとした人たちは、そのお金をすべて失う羽目になることだってあったんです。⁶



【図9】

『マヤ』では、家族だけでなく、こっそり愛人にも渡しておいてくれ、と頼む男性もいる。



【図10】



【図11】

『サラーム・モスクワ』でも描かれていたように、移民労働者はきわめて不安定な立場に置かれている。【図10】ではタジク人が住む集落の代表者がロシア人に金を渡し、前者の側は後者の機嫌を伺っている。【図11】は、その後、集落にロシア連邦移民局の職員たちが不法に住むタジク人を捕まえに来る場面で、その中には、【図10】で登場した男性も混じっている。【図10】は、不法移民を見逃してもらうために賄賂を渡していた場面なのだ。だが完全に野放しにするわけにはいかず、移民労働者はいつ検挙されてもおかしくない、不安定な立場に置かれている。捕まったタジク人たちはバスに乘せられてその場を去り、捕まらなかった者たちも同じ場所にはもう留まることはできない。



【図12】

数多くあるロシア・中央アジアの移民労働者映画の中にあって『マヤ』の優れた点を挙げるならば、マヤが頼ることになるタジク人アフマドとロシア人ナー ज्याの造型がある【図12】。この2人は共に正式な伴侶がいるにも関わらず、奇妙な友情と信頼関係で結ばれ同棲している。アフマドはタジキスタンに妻子を残してロシアに出稼ぎに来ており、ナー ज्याとは彼の妻も公認の仲になっていることが映画の中で告げられる。【図9】でも登場していたように、家族のために出稼ぎに来ている労働者の中にも、祖国とロシアにそれぞれ妻と愛人がいることは珍しくない。ラリーサ・サディロワ『マヤ』は、ただ移民労働者の虐げられた生活を描くだけにはとどまらない。移民労働者と女性労働者の問題を提起しながら、タジク人コミュニティの中にその外の世界と同様、ずるい人間もいればだらしのない人間もいる、さまざまな社会の階層があることを浮き彫りにしているのだ。

6 堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』ミネルヴァ書房、2010年、146頁。407頁にもこの送金システムに関するタジク人の証言が収められている。

第1回 映画上映会アンケート

— 回答数 158件 / 参加者数 405名
申込者数 522名

質問 1 今回の上映作品『マヤ』はいかがでしたか？



評価平均 4.10 (5段階評価)

質問 2 作品・解説についてのコメント・評価

■コーカサス＝アジア地域と接する「ヨーロッパ」であるロシアの興味深い社会問題を垣間見た気分になった。実際にはロシアではこのような旧ソ連圏からの労働者とロシア人労働者との軋轢があるのか気になった。

■画質が良かったので風景の美しさも楽しめた。仕送りのシーンなどは解説がなければ何のことか分からなかったと思うので、事前に解説してくれて良かった。

■移民労働者の深刻な貧困の実態に、観ていて何度も辛くなりましたが、最後は人々の心の温かさやしたたかさを印象づけて作品が締めくくられたのでホッとしました。

■ロシア映画を見る機会はアクション作品を除いて初めてであり、貴重な体験ができたと思う。作品についてだが、恋人と結ばれるハッピーエンドでもなく、泥水をすすするような極貧生活に陥るようなバッドエンドでもなく、ただただ振り回された挙げ句の果て遠国の地に留まざるを得なくなるという終わり方に一種のリアルさを感じた。

■長年ロシア語を学び、ロシアと関わってきましたが、モスクワで中央アジア出身の出稼ぎ労働者を何度か見ました。モスクワ空港で、都心へ行くバスの中で、道を尋ねられたこともありましたが。また中央アジア出身のタクシー運転手にも出会いました。そういうことを思い出しながら、映画を見ていました。日本でも同じような、外国人労働者がいて、それぞれの過酷な運命に翻弄されながら生きています。主人公のマヤは、言葉少なく、で

もどこか神秘的な美しさを持つ少女ですが、このあとロシアでささやかでも幸せな家庭を持って、生きてほしいと思いました。映画館では見られないような映画をこれからも見せていただけるといいです。

■ドキュメンタリーのようなものでした。初めてロシア映画、タジクの方を主人公とした映画を見ましたが、マヤが無力でずっと幼くあまり考えずに出稼ぎに来てしまったんだろうとかなり心配になりました。出稼ぎにきた環境下のほうが、タジクでの生活より水準が低いという衝撃、また言葉も分からずとにかくお金が必要で出稼ぎに行く点、出稼ぎでなく自国で産業を発展できる手立てはないのか知りたくなりました。

■ロシアにおける移民の変遷を聞いて（冷戦崩壊後中国系から中央アジア系に移民の構成が変わる）思うに、経済成長が著しくなった中国（中国人）はロシアに移民をしなくても自国での働き口や欧米への移民（たとえば、IT関連の学習やスキルを身につけてシリコンバレーに移民先を変えるetc...）にシフトし、その後釜として、タジキスタンやクルグスの人々がロシアの労働集約産業、二次労働市場、インフォーマルセクターで中核を担うようになってきたことが解説と映画を通じてわかった。詰まるところ、プッシュ要因/プル要因といった移民をするための理由はグローバル経済を通じて、地球規模で変遷しているということだ。マヤやハミード、アフマドとロマ親子は、こうしたグローバル社会の影——先進国や経済大国でのエッセンシャルワーカーであるのと同時に犠牲者でもある——を映し出す存在でもあるのだと感じた。

■ 劇的な場面で映画を盛り上げ、明確なハッピーエンドやバッドエンドで物語を締めるのではなく、淡々と、しかし丹念に中央アジア移民の生活を描きだしているところが良かった。社会の周辺に位置する決して裕福ではない人びとの停滞した空気感が、この映画の中の生活から非常にリアルに伝わってきた。(映画の終わりの理解にいまいち自信が持てないが、出稼ぎ青年ロマが主人公マヤと裏ですぐ戻ると話をつけており、二人は一緒に暮らすようになるということで良いのだろうか。)しかし、これからのマヤの人生が心配でならない。駆け落ちでロシアに行った彼女を家族は決して許さないだろうし、恐らく彼氏はロシアに戻ってこないだろう。マヤの身元引受先のロシア人女性は良い人だが、彼女の下で単純労働を続け少ない金額を受け取る生活は幸せとは言えない気がする。確かに娘を持つ親なら、この映画を見た後は決して子供をロシアに送りたくはなくなるだろう。解説で先生が仰っていたことと重なるが、単なる苦しい中央アジア移民問題という側面だけではなく、タジクの結婚事情、男女関係、移民の言語事情、そして女性の労働問題など様々なトピックに触れることができた。そして、これは単なる異国の話ではなく、日本の技能実習生と重なる部分が多いと感じる。非文化的な住居空間ばかり、低賃金・単純労働ばかり。社会問題を考えるいいきっかけとなる映画だった。

■ 日本で問題になっている技能実習生が重なって見えました。一人の人間として生まれてきたわたしたちが住むところによって価値が違っているように扱われるということが世界のあちこちで起こっていることへの憤りを覚えます。企画をしてくださった筑波大学の先生方、スタッフの皆さま、ありがとうございました。

私もこの映画を見ながら、日本で技能実習生が置かれている劣悪な環境を想起せずにはられませんでした。

元号を物語の縦軸として使用するユニークな特徴を持つ瀬々敬久監督の映画に、『糸』(2020)という作品がありました。平成元年に生まれた男女が出会いと別れを繰り返し、長い別離を経て平成の終わりに再び出会う恋愛映画で、大ヒットしました。この映画では、主演の小松菜奈演じる女性がシンガポールのネイルサロンで働き、高級ホテルのプールサイドで裕

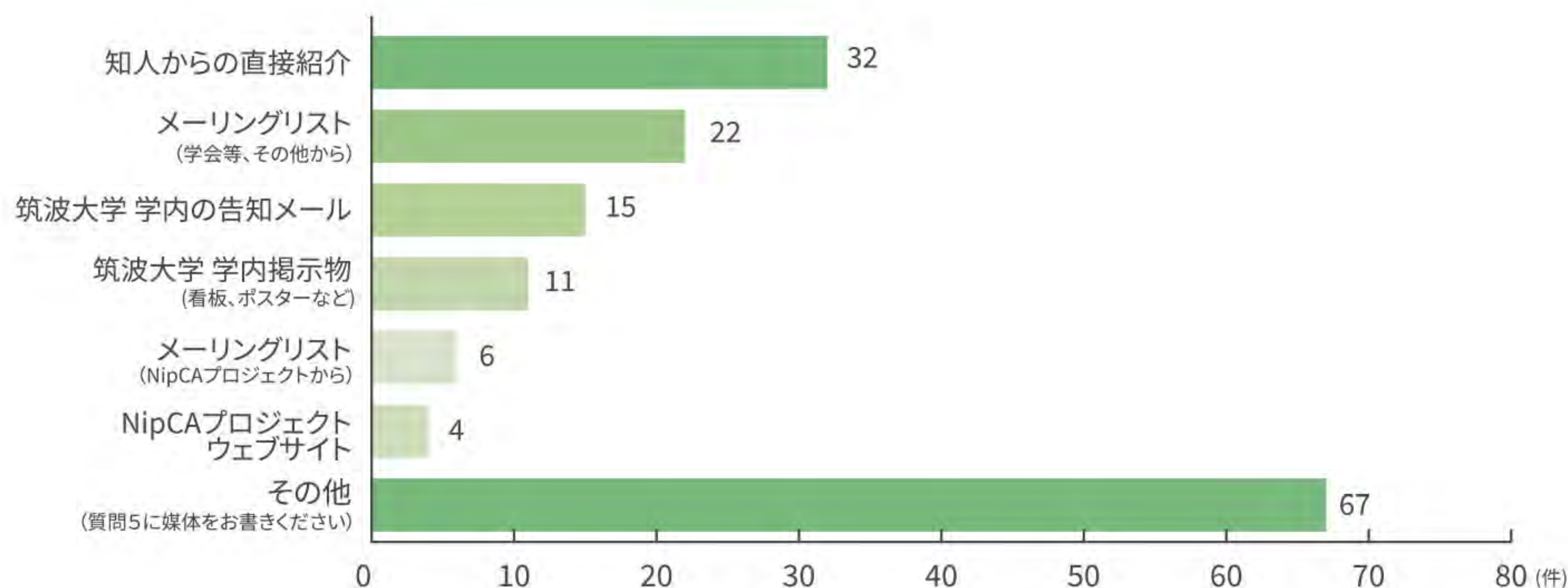
福な客の足元に跪いているとき、「昔は沖縄とか東京に行ったけど、最近は来てくれるのね」と言われます。私はこの場面を見て、バブルに沸くシンガポールとどんどん貧しくなっていく日本の労働者の逆転した関係が、きれいに表象されているなと思いました。技能実習制度で外国人を酷使し、多くの国民がそのことに無自覚であった日本で、この先自らが移民労働者となったとき、その過酷な現実を受け止められることができるでしょうか。

また、『糸』ではこども食堂が控え目ながらも重要な場面で登場します。虐げられた者たちへの目配りが撤退されていることは、作り手のニューマニストとしての姿勢を反映しています。生活保護受給者を扱った瀬々監督の『護られなかった者たちへ』(2021)などもそうですが、映画はスクリーンに映し出すことで多くの人が見落としている問題を提示します。このオンライン上映会を企画している主な理由のひとつが、そこにあります。

■ 女性の監督さんらしい繊細さや視点があったように思います。私の知る中央アジアの若い子たちもやはりロシアへの出稼ぎを当たり前のように将来の選択肢に入れていましたが、その気軽さと映画に描かれた生活の重さは噛み合っていないと感じました。知り合いがいるとはいえ言葉がわからない国へ未成年の少女が移動する、ということへの心理的なハードルが日本人より低い気がするのは、ソ連という枠組みでひとつだった過去があるためなのか、地続きという安心感があるためなのか、どちらなのでしょう。

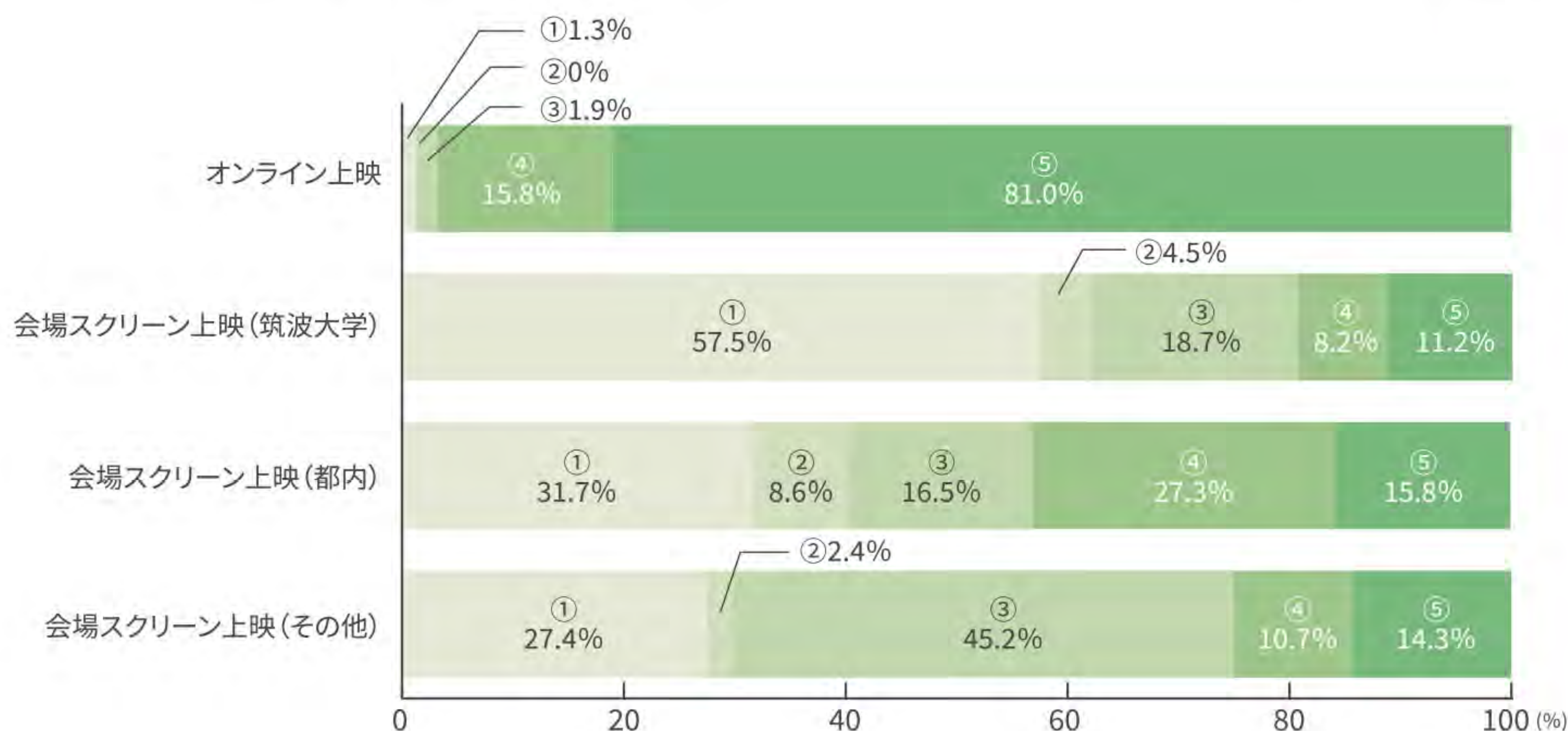
■ この作品の中で印象に残ったシーンが労働者の「自分たちはロシアで働いているのに中国の食物しか食べられない」と言ったシーンで、この言葉が最初に先生が言及していた、労働者の家族は労働者がロシアで働いているから少しはいい生活ができていると思っていたのに実際の労働風景を見てショックを受けるというものに通じるなと感じた。

質問3 今回のイベントは何で知りましたか



質問4 今後参加を希望する上映会があった場合、開催形態についてのご希望を教えてください

(① 参加したくない/できない ② あまり参加したくない ③ どちらともいえない ④ 参加できる ⑤ ぜひ参加したい)



質問5 自由記述欄(質問3の「その他(質問5に媒体をお書きください)」の回答を含む)

- Twitterで知った(36件)
- Facebookで知った(10件)
- 筑波大学TWINSの掲示板で知った

■愛知から参加しました。今回、オンライン上映だったからこそ参加できたと思っております。都内であればなんとか参加できると思いますが、筑波大学までは難しいです。

■主婦なので、今回ちょうど晩御飯ドンピシャの時間帯（準備～食事～片付け）でダメかと思いましたが参加でき嬉しかったです。土日よりは平日のほうが参加しやすいです。今後も、新しい作品・古い作品両方見たいので、是非企画をお願いします。今回はありがとうございました！

家事のお忙しい合間にご参加ありがとうございました。このオンライン上映会は、主婦の参加の方が多かったのも嬉しいことでした。なかなか映画館に行く時間をつくれない方に、今後なるべく参加していただきたいと思っています。

■平日だと勤務があるので19:00～スタートくらいが助かります。私は東京都内勤務ですが、このような企画はオンラインの方が良いような気がします。貴重な機会なので、海外の友人にも紹介しました。以前、東京外大でも同様の企画があった際は、外大に行っていました。やはり映画上映とゲストセッションはリアルであった方が良いでしょう。それだと土日の昼間が良いのと、筑波大学はやはり遠いですね。希望上映は今回の種類のような中央アジア・ロシア関連に大いに興味があります。少し広げるとコーカサスも。東京国際映画祭やフィルメックス、イスラーム映画祭など、各種映画企画は最近増えているものの、中央アジア・ロシア関連はやはり少ない印象がありますので、今後の企画にも大いに期待しております。主催者の皆様、ありがとうございました。

■遠方なのでオンラインだと助かりますが、しかし対面で同じ画面を鑑賞することも非常に大事な経験だと思いました。状況が許せば、ぜひ学内、都内でのスクリーン上映もしていただければと思いました。

■夏場の野外イベントとして中央図書館前とか第一エリアの池のほとりで上映して、会場で留学生の支援募金とか交流会や母国の食事の試食会など出来ると凄いななどと夢想しています。

■個人的には、会場スクリーン上映は場所というより実施が平日かどうか大きなポイントです。もし土日祝日であれば、関東県内なら足を伸ばしてもいいかなと思います。描かれた時代は古いものですが『山嶺の女王クルマンジャン』が面白いと聴いたので、先生の解説付きで観られたら嬉しいです。

■もしも開催日程が複数あれば、より参加しやすくなるので、ありがたいなとは思っています。

上映権の関係上制約があって厳しいところがありますが、これからもさまざまな上映会を企画していきます。

■申し込みがギリギリに成り解説が聴けず残念でした。後日、YouTubeなり、文章でWeb上で起こし残して頂けるとありがたいです。

■他の方の感想も知りたいので、感想をまとめた記事があると嬉しいです。

大変長らくお待たせいたしました。本報告書をどうぞお楽しみください。第2回、第3回のアンケートでは、こちらもびっくりするくらい長文の感想が揃いました。

第2回 オンラインによるロシア・中央アジア映画上映会

上映日 2021/8/20 [Fri]



タイトル カブールの孤児院

監督 シャフルバヌ・サダト

脚本：シャフルバヌ・サダト
 プロデューサー：カーチャ・アドマイト
 撮影：ヴィルジニー・スルデー
 出演：クドラトラ・カトリ、セディカ・ラスリ、マシフラ・フェラージ、ハシブラ・ラソーリ
 原題：The Orphanage
 製作年：2019年
 時間：90分
 製作国：デンマーク、ルクセンブルク、フランス、アフガニスタン
 言語：ダリー語、ロシア語、ヒンディー語、ウルドゥー語
 日本語字幕：梶山祐治
 ダリー語監修：グロマリエフ・シラリ

映画で見るアフガニスタンの社会と言語 ―ソ連・中央アジアとの関係を通して―

梶山 祐治

— アフガン人映画監督シャフルバヌ・サダト

第2回オンラインによるロシア・中央アジア映画上映会
 の上映作品『カブールの孤児院¹』(2019)は、1991年
 生まれのアフガン人監督シャフルバヌ・サダトによる長



【シャフルバヌ・サダト】

編第2作である。『カブールの
 孤児院』はもともとアフ
 ガニスタンの現代を描く5
 部作構想で、2つ目の作品
 として撮られた作品だった。
 3作目を準備していたが、
 2021年8月、米軍が撤退を
 決定した後のアフガニスタ
 ンでは瞬く間にタリバンが
 勢力を伸ばすことになった。
 これほど早くタリバンが首

都に進軍してくるとは予想していなかったサダトは、上

映会時点ではまだ首都のカブールに家族と留まり、脱
 出の機会を伺っている状況だった。8月17日時点の「ハ
 リウッド・レポーター」のインタビューでは、「私が今回生
 き延びて、もっと映画を撮る機会があるなら、私の映画
 はすっかり変わってしまっているでしょう。[中略]私が
 今を生き延びたら、何が起きたかを映画に撮るつもり
 です²」と力強く答えていた。サダトは女性であり文化人
 ということもあり、その後の安否が非常に心配されたが、
 上映会の直後、無事、国外に家族とともに脱出出来た
 ことが『カブールの孤児院』のプロデューサーを務めた
 カーチャ・アドマイトより発表された。

— アフガニスタンの国土

アフガニスタンの面積は652,225平方キロメートル
 で日本の約1.7倍、人口は約3,200万人を抱える。公用
 語はダリー語とパシュトー語で、『カブールの孤児院』に

¹ 現地の発音ではカーブル。今回の上映会では慣用例を重視して、日本人に違和感のないカブールという言い方を優先して採用した。なお、本作品は『カーブルの孤児院』のタイトルで中央アジア今昔映画祭で上映された。本書1頁の注2のURLを参照。

² “Cannes-Winning Afghan Director Trying to Escape Kabul: ‘If I Survive This, I Will Make Films About What Happened’”
[\[https://www.hollywoodreporter.com/movies/movie-news/afghan-director-shahrbanoo-sadat-trying-to-escape-afghanistan-1234998538/\]](https://www.hollywoodreporter.com/movies/movie-news/afghan-director-shahrbanoo-sadat-trying-to-escape-afghanistan-1234998538/)

おける主な使用言語はダリー語である。それ以外にも、この作品にはロシア語、ヒンディー語、ウルドゥー語が登場する。ダリー語はペルシア語の一種である。ペルシア語の標準語を分類すると、イランのペルシア語、アフガニスタンのダリー語、タジキスタンのタジク語の3つに大別される。民族は、パシュトゥーン人、タジク人をはじめとして、ハザーラ人、ウズベク人など、多くの民族が居住している。このように、言語・民族的な観点からも同国と中央アジアの接点を垣間見ることができる。

アフガニスタンにおける20世紀の政権の流れについて簡単に整理すると、以下ようになる。1919年にイギリスの保護領から独立したアフガニスタンは、1973年、王政から共和制に移行するが、そののち共産化する。1989年に撤退すると、民族間の内戦が続く。1996年、タリバンが国土の大半を制圧するが、2001年、米国同時多発テロの犯行グループをかくまったとして米軍の攻撃を受け崩壊した。2004年、初の選挙による政権が成立した。2021年、米軍が撤退を開始すると、タリバンはたちまち首都に進軍し支配下においたのだった。以上の簡単な概略からも、アフガニスタンがいかに他国の侵攻を受けてきたかが分かる。

— ソ連のアフガニスタン軍事介入

『カブールの孤児院』は1989年のソ連軍撤退期が舞台である。ソ連がアフガニスタンに軍事介入した経緯から少し詳しく見ておく。1978年4月、アフガニスタンでは軍事クーデターによって同国共産党のアフガニスタン人民民主党が政権を獲得し、ソ連と緊密な協力を開始した。ところが党首にしてアフガニスタン大統領となったタラキが、派閥闘争によって副大統領アミンに殺害されてしまう。ソ連はアミンを力づくで排除して、ソ連にもっと忠実で、イスラーム主義反乱勢力との戦闘をもっと効果的に遂行できる、新たなアフガニスタン共産党の指導部を擁立する準備を開始した。これには冷戦体制を背景とする周辺国の事情も大きく左右していた。アフガニスタンの隣国であり、ソ連とは南部で国境を接するイランで1978年1月に起きた革命と関連させて、冷戦史研究の泰斗であるウェスタッドは以下のように説明している。

イラン革命が、モスクワにそのアフガニスタン政策をいっそう重視させることになった。クレムリンは、イランにおいて左翼が権力を奪取するとはほとんど考えていなかったが、イスラーム主義者が新政府の中心を形成するとは予想していなかった。1979年3月ないし4月までには、ソ連の指導部はテヘランをその地域の安全保障に対する潜在的に危険な挑戦とみなすようになっていた。したがって、アフガニスタンにおけるソ連のプレゼンスは新たな重要性を帯び、カブールは情報収集とスパイ活動の拠点として戦略的価値と有効性の双方を増したのである。³

こうしてソ連は、イスラーム勢力を排除するため、アフガニスタンへ軍事侵攻を開始したのであった。だがソ連の介入は当初の思惑通りに進まず、軍事侵攻は長期化していく。

ノーベル文学賞を受賞したスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『アフガン帰還兵の証言⁴』には、アフガニスタン軍事介入に関わった兵士たち、息子や夫を失った女性たち、看護師や事務員として従軍していた女性たちの「証言」が収録されている。原題は『垂鉛の少年たち』と言って、アフガニスタンで死亡し、本国へ送還される兵士が垂鉛製の棺に納められていることに因んでいる。アレクシエーヴィチの著書から、ソ連国内においてアフガニスタンで従軍することがどう位置付けられていたかがわかる、2つの証言例を引く。

[証言1]

俺が召集されたのは1981年だ。戦争が始まってすでに2年たっていたが、「市民生活」では戦争のことをほとんど知らなかったし、あまり話題にならなかった。[中略]あとになって初めて知ったのだが、その頃すでに垂鉛の棺は街に運ばれていたが埋葬は夜中にこっそり行われ、墓跡には「戦死」ではなく「死亡」と記された。なぜ我が国の19歳の若者たちが突然死に始めたのか、問おうとする者はいなかった。⁵

[証言2]

部隊長に呼びつけられて、行ってみると「新しい車を運転したくないかね?」と聞く。もちろん一斉に「はい!

³ O.A.ウェスタッド(佐々木雄太監訳)『グローバル冷戦史:第三世界への介入と現代世界の形成』名古屋大学出版会、2010年、325頁。

⁴ スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ(三浦みどり訳)『アフガン帰還兵の証言:封印された真実』日本経済新聞出版、1995年。なお、本書は長らく絶版となっていたが、上映会后、岩波書店より奈倉有里訳『垂鉛の少年たち:アフガン帰還兵の証言 増補版』(2022年)が刊行された。

⁵ 同書、27頁。

それが夢です」と答える。それに続いて、「しかし、まず、開拓地に行って小麦の取り入れを手伝わなければならない」と言われた。全員同意した。

飛行機の中でパイロットから偶然聞いたのは、タシュケントに向かっているということだった。思わず「俺たちが向かっているのは本当に開拓地なのだろうか？」という疑問が湧いた。降りたのは確かにタシュケントだ。[中略]

整列すると直ちに言い渡されたのは、「数時間後に飛行機がやってくる。軍務を果たすためにアフガニスタン民主共和国に行くのだ」ということだった。

そこでどうなったと思う？ 恐怖心とパニックで人間が動物のようになってしまった。⁶

[証言1]は、手榴弾兵として従軍していたある兵卒のもので、国がいかにアフガン軍事介入の真実を隠蔽していたかがわかる。1981年の時点ではまだ、国民の多くが何が起きているかを知らなかったのだ。[証言2]は、運転手として従軍していた兵士のもので、国が若者たちを騙して召集していたことを例証するものである。後述するように、アフガニスタンと国境を接するウズベキスタンの首都タシュケントは、当時戦地への前線基地となっていた。

ソ連の軍事侵攻が多くの民間人の犠牲者を生んだ一方で、この泥沼化にアメリカが果たした役割は決して無視できない。冷戦時代の米ソは、アフガニスタンやラテンアメリカ、あるいはアフリカといった自国の領土でないところで代理戦争を行っていた。アフガニスタンにおけるソ連と敵対する勢力を支援するアメリカの工作を描いた作品に、マイク・ニコルズ(1931-2014)の映画『チャーリー・ウィルソンズ・ウォー』(2007)がある。下院議員のチャールズ・ウィルソンはテレビでアフガニスタン難民が苦しむ映像を目にし、CIA諜報員と協力して、ソ連の軍用ヘリを簡単に撃ち落とすことのできる携帯地对空ミサイルのスティンガーをムジャヒディーンに提供する活動に奔走するようになる。この武器給与はのちにイスラム武装勢力を強化することになるのだが、日米同時多発テロ後の作品にもかかわらず(あるいはそれゆえ)ソ連軍機が次々と撃ち落とされる爽快な映像を提

示するこの映画に批判的な視点は皆無であり、危険な武器給与を美談として語ることが徹底されている。内省できないアメリカの病巣もまた深い。

ウェスタッドは、米ソの対立を背景として加熱していくアフガニスタンが危険になっていったことを指摘している。

ソ連の攻勢は、ただアフガニスタン市民の犠牲を増やしただけだった。増加した難民は新たなムジャヒディーンの供給源となり、赤軍将兵の死傷者も増加した。それはまた、反乱勢力へのアメリカ、中国、パキスタンによる支援も増大させることになった。レーガン政権はアフガニスタンのイスラーム主義者に2万6000フィート[約8000メートル]の射程距離を持つ先進的な携帯地对空ミサイルであるスティンガーを給与した。同盟国イギリスでさえ、この対応には驚かされた。ソ連空軍部隊の活動はより危険なものとなった。⁷

1980年代のソ連では指導者が立て続けに交代するが、アフガニスタン軍事介入の問題を解決することはできず、1985年に第7代最高指導者となったゴルバチョフの代になってようやく、1989年2月にソ連軍は撤退を完了する。アフガニスタン国内には多くの武器が残され、タリバンの手に渡ることになる(これは現在、アメリカの最新兵器がタリバンの手に残っていることと同じ構造である)。そしてこの頃には、国際主義的なイスラーム主義者たちのネットワークがアフガニスタンと隣国パキスタンで形成され始めていた。シャフルバヌ・サダト『カブールの孤児院』は、まさにこの時期を舞台にしている。

――「アフガン戦争」の表象

ソ連時代アフガニスタンで起きていたことがいかに隠蔽されていたかをアレクシエーヴィチの著書が示していたように、当時の映画が軍事介入の真実を描くことはなかった。その真実の一端が徐々に映画を通して描かれるようになってきたのは、ソ連解体から一定の期間が経ち映画産業も復興した2000年代に入ってからのことである。ここでは、アフガニスタン

⁶ 同書、43頁。

⁷ O.A.ウェスタッド(益田実、山本健、小川浩之訳)『冷戦 ワールド・ヒストリー(下)』岩波書店、2020年、316頁。

への軍事侵攻をロシアでの呼び名に倣って「アフガン戦争」と呼ぶ。

ベラルーシを代表する映画監督ワレリー・リュバレフ(1939-)の作品『繋がれた男』(2002、未)は、アフガニスタンで従軍したことで人生が狂ってしまい、立ち直れずにいる男の悲劇を描いている。タイトル(原題は「Прикованный」)は、主人公パーヴェルがPTSDの苦しみから発作が起きると、予め自らが暴れるのを防ぐため身体を手錠で拘束することに因む。同時に彼が縛られている過去も暗示しているに違いない。出兵中、妻に逃げられ、生き甲斐を見いだせないまま老いていくパーヴェルの前に、謎の若い女性アンナが現れる【図1】。奇妙な共同生活が始まり、パー



【図1】

ヴェルは次第に年の離れたアンナを異性として見るようになるが、実は彼女は別れた妻が産んでいた彼の実の娘であることが判明し、両者ともに絶望して幕を閉じる。「アフガン戦争」がロシア人に残した癒し難い傷を主題とした作品である。

もうひとつ、傷跡を描いた作品としてバフリディン・アイナザーロフとラシド・マリコフの共同監督作品『不屈』(2018、未)がある。ウズベクフィルムで製作された、ウズベキスタン西部、カラカルパクスタンが舞台の作品である。主人公は病に蝕まれてすでに余命いくばくもない中年男性で、彼の元にはときどきアフガニスタンで命を落とした旧友の亡霊が出現する【図2】。アフガニスタン



【図2】

が彼に与えた傷でもあるこの亡霊は、PTSDの症例として読み解くこともできる。主人公の男性は残された時間が少なくなっていくなか、死の真相を暴き、不本意に異国で命を落としたこの旧友の無念を晴らそうと試みる。その目的が達成されたときは、旧友の亡霊が成仏し、主人公の男性自身もこの世を去る瞬間である。アレクシエーヴィチの著書の中で、若い兵士たちがアフガニスタンに送られるためタシュケントに騙されて連れてこられていた証言があったように、中央アジアで珍しくアフガン帰還兵の映画が作られていることには、ウズベキスタンがアフガニスタンへの前線だったという事情がある。これらの映画には、「アフガン戦争」がロシア・中央アジアに残した傷跡が表象されているのだ。

「アフガン戦争」で受けた傷を個人でなく社会が受けたレベルで描いた作品が、アフガニスタンでの従軍経験を持つロシアの映画監督アレクセイ・バラバーノフ(1959-2013)の『アフガン発:貨物200便』(2007)である。この作品は次第に社会の歯車が狂っていく1984年のロシアを描いており、「アフガン戦争」が社会に与えたダメージを記録している。原題で「Груз 200」と言い、邦題にもある「貨物200便」とは、アフガニスタンからソ連兵士の遺体を載せる飛行機の隠語であった。【図3】は到着したばかりの貨物200便から亜鉛の棺が運び



【図3】

出されているところである。この場面をよく見ると、画面中央で亜鉛の棺を抱えた兵士たちの左横を、複数の兵士たちが貨物便の中へ駆け足で乗り込んでいく様子を確認することができる。実際に【図3】のように、遺体を運んできた貨物便にそのまま兵士が乗り込んで新たな戦地へと送られていったのかは不明である。だがストーリーテリングが巧みなバラバーノフは、アフガニスタンへ派遣され、死体となって帰ってくる兵士とあたかも入れ替わるかのように、若者が次々と派兵されていたという現実を、わずか数十秒の短い映像で表現する。

現実を表象する、映画の想像力が働いている場面である。

以上の作品がいずれも優れた「アフガン戦争」の表象であることには違いないが、アフガニスタンから見ればそれは軍事介入そのものと同様、アフガニスタンへ注ぐ眼差しは同国の外側からのものに過ぎない。ロシアで使用される「アフガン戦争」という言葉自体も、軍事介入した側でありながらロシアの被害者意識が反映した用語となっている。戦場となったアフガニスタンの人々にとって、ソ連の軍事介入はどのような影響があったのか。シャフルバヌ・サダト『カブールの孤児院』はソ連軍撤退期を舞台にし、その一端を知ることができる作品である。

— アフガン人監督シャフルバヌ・サダトの『カブールの孤児院』

シャフルバヌ・サダトはイランに難民として暮らしていた両親のもと、1991年に生まれた。2001年の日米同時多発テロの後に一家はアフガニスタンへ戻り、10代を人里離れた山村で暮らしていた。この時の生活の様子は、彼女の長編第1作であり、アフガニスタンの現代を描く5部作構想の最初の作品『狼と羊』(2016)に色濃く反映している。この映画は少年クドラットの父の葬儀場面から始まり、母親が早々に再婚したため、親しくしていたハザーラ人の少女セディカと別れ、少年は親戚を頼って街へ送られる【図4】。映画の最後では武装集



【図4】

団が接近していることが告げられ、村の人々が慌てて逃げていくところで幕を閉じる。そして、長編2本目『カブールの孤児院』(2019)の冒頭、クドラットが路上に廃棄された車の中でひとり目を覚ますシーンに繋がっているというわけである【図5】。

実は、『狼と羊』も『カブールの孤児院』も、タジキスタンでロケ撮影された。自らの作風をドキュメンタリー的

手法のシネマ・ヴェリテと呼ぶサダトの長編第1作『狼と羊』は、アフガニスタンでは撮影が難しかった⁸。『カ



【図5】

ブールの孤児院』はミュージカル場面が挿入されるなど通常の映画が使用する語りの枠組みから逸脱しているところがあるが、『狼と羊』はよりドキュメンタリー的な様式が徹底されていた。先述したように、アフガニスタンとタジキスタンの言語が近い関係にあるからこそ、このように代替して撮影が可能なのであった。

言語だけでなく、アフガニスタンとタジキスタンには、文化的にも共有しているものが多い。例えば、映画が始まって間もなく、露店が並ぶ一角で、大の男同士が卵をぶつけ合い、その様子を大勢の人間が囲んで見守っている場面がある【図6】。これは、「トゥフムボジ(トゥフムジャング)／Тухмбозй(тухмчанг)」という、タジキスタンでノウルーズ(旧正月)の時によく見られる、相手の



【図6】

卵を割って自分のものにする遊びである。それに加えて、この映画にみられるソ連との文化的関係も興味深いものがある。ピオネールとして招待されたモスクワで、マシフはチェスの才能を発揮して、ソ連のコンピューターに勝利する【図7】。ガキ大将でチェスの腕に自信のあるエフサンは、帰国したマシフに対して「これがアフガン流だ」といって勝負を挑むのである。このエフサンの態度には、アフガニスタンから見れば、世界的には強豪国として知られるソ連のチェスも、ヨーロッパ経由で伝わった新興国に過ぎないという自負がある。アフガ

⁸ “LFF 2016 Women Directors: Meet Shahrbanoo Sadat — “Wolf and Sheep”

[<https://womenandhollywood.com/lff-2016-women-directors-meet-shahrbanoo-sadat-wolf-and-sheep-f46db9e8970c/#.dxiwfhc7g>]

ン人は、古代インドのボードゲームであるチャトランガに起源を発するとされるこのゲームを、アラブ世界を通じて古くから親しんできたのだ。『カブールの孤児院』には、こうしたアフガニスタンの文化の多様性を反映した興味深い点を多く観察することができる。



【図7】

そしてこの映画を彩るのが、同地で人気のインド映画である。近年のアフガニスタンでは、ほとんどの民放で放送されるインドのメロドラマが人気で、多くの国民がインド人俳優のファッションやライフスタイルに夢中だったという。2008年には情報文化省が放送を中止するよう民放に指導したが、国民は望まず、指導は無視される形になったほどだった。⁹ 【図8】は、『カブールの孤児院』が始まって間もなく、男たちが映画のチケットを求めて行列を作っている様子である。中には初めて映画



【図8】

を見るんだという、中年の男性もいる。映画館に掲げられた大きな看板は、アミターブ・バッチャンが怒れる若者を演じて大きな支持を集めたインドの大ヒット映画、ティーン・アーナンド『シャヘンシャー（皇帝）』（1988）である。映画内映画の歌と踊りの場面では、クドラットも他の観客と一緒に踊っている【図9】。インド映画といえば、こうした歌と踊りを連想する人が多いだろう。『カブールの孤児院』もまた、インド映画の様式を踏襲するかのように、登場人物が突然、歌い出す場面がいくつか存在する。それは映画にただ華を添えて



【図9】

いるだけではない。いずれの場面も、主人公クドラットが言葉にできない深い感情を抱いている時に出現しているのだ。例えば、そのひとつに彼が孤児院で勉強することになった初日、クラスメイトのある少女を認めて無言で見つめ合う場面がある。実はこの少女こそ、前日譚である『狼と羊』で親しくしていたモンゴル系ハザーラ人のセディカで、成長した2人は孤児院で再会しているというわけである。【図10】は、教室で再開し、初めてふたりの眼差しが交差する瞬間である。すなわち、クドラットが言葉に出来ない感情を抱いている時、彼が大好きなインド映画の形式を借り受けて、その感情が歌と踊りによってスクリーンに表象されているのである。

ソ連軍が撤退すると、女性はずぐにヴェールを被るよ



【図10】

うになり、孤児院で子供たちに提供される食事は途端に粗末になる。映画の序盤で、シーク教徒と思われるシンが、髪をムスリム風に仕立て、友達に「ムスリムの誓いを立てるか？」と言われて教室でふざけていたシーンがあった【図11】。もはや異教徒同士のこうした交流が見



【図11】

⁹ 石原陽一郎、芽和伊、長岡正哲、石川かおり『アフガニスタンの未来をささえる：国際機関職員の仕事』岩波ジュニア新書、2009年、18頁。

られる余地はなくなり、現在に至るまで、自由な時代は失われたままである。常に他国の干渉を受け続けるアフガニスタンにおいて、その皺寄せをもっとも受けているのは女性と子供だ。

【図12】は、ガキ大将のエフサン(中央)とその親友アサド(右)が、新入りで気の弱いファヤズ(左)をいじめている場面である。生意気なエフサンに、はじめ腹を立て



【図12】

る観客は少なくないかもしれない。しかし体力がありエネルギーを持て余していたエフサンは、自慢のチェスでもマシフに負かされ、腹を立てて暴れると年長者であるため教師から一番きつく叱られ、それが彼の不満を爆発させる。【図12】でも確認できるように、プライベートな空間を持たない孤児たちにとって、ベッド脇の空間は自己表現できる唯一のスペースである。クドラットは映画俳優の写真を多数貼り、女性好きのアサドの場合、その欲望が女性のポスターとして壁に直接投影されている。エフサンはアフガニスタンに嫌気がさして、外国に行きたい願望をアサドに打ち明けていた。その彼の欲求が世界地図と飛行機というポスターによって代弁されているのだが、かろうじて受け皿となっていた孤児院を去らなければならなくなり、居場所を失った彼の吐け口は、果たしてどこへ向かっていくだろうか。その時すでに、タリバンの勢力は彼のすぐそばまで迫っているのだ。

第2回 映画上映会アンケート

— 回答数 171件 / 参加者数 368名
申込者数 501名

質問 1 今回の上映作品『カブールの孤児院』はいかがでしたか？



評価平均 4.39 (5段階評価)

質問 2 作品・解説についてのコメント・評価

■アフガニスタン出身の監督の映画を初めて観る貴重な機会になった。最後のシーンの「聖戦士」と子どもたちの乱闘は冒頭のインド映画上映を模したものだっただろうか。後半、ファヤズの精神病棟行き、エフサンの退所、ハシブの死亡と怒涛の展開だが、監督にはどのような意図・メッセージがあったのか気になった。

クドラットたちがモスクワから帰ってくると、ファヤズが病棟で鎖で繋がれているというのは、映画でもっとも不思議なシーンです。ただし、その兆候がないわけではありませんでした。まず最初に、ファヤズはアサドが所有する女性の裸体が描かれたカードを見つけると、ひどく興味を惹かれ、自分の懐にしまっしまいます。その後、夜中にこっそり起きて抜け出すと、別の部屋で眠る長髪の人物のベッドの傍に立ってじっと見つめるのです。私はこの人物が女性だと思っていましたが、ダリー語の監修をお願いしたシリリさん曰く、友人のシンではないか、とのこと。確かに、よく見るとこの人物は肩幅がけっこう広いですし、女性の部屋に侵入するというのは、あまりに罪が重いことかもしれません。いずれにしろこの時ファヤズは、長い髪に欲情していたことでしょう。こうした「道を踏み外した」行為の延長上、彼が隔離されるという事態に至った、というふうに考えることができそうです。



■タリバン政権の前まで、女性がスカーフを被ることもなく、社会的地位のある仕事に就いていたこと、市民はその時代の方が良かったと考えていることがわかりました。ソ連軍が去った直後にタリバン政権が誕生したことが、今回の米軍が去った後の出来事に重なりました。

■時代背景だけでなく画面に出てくる物など細部も説明いただいたことで、ソ連との関係やタリバンの登場など理解することができました。まさに今観なくてはいけない作品で、私たち世界中が知らなくてはいけないことなのだと思います。監督がご無事で、表現の自由を保障され、事実を伝えることができ、作品を作り続けられるような世界にしなければなりません。何かできることはないのでしょうか。

■カブールの孤児院を舞台に、1980年代末期のアフガニスタンの情勢を巧みに描いた作品だと感じた。ソ連から支援を受けていた孤児院とその孤児たちの生活が、アフガニスタン民主共和国が崩壊しタリバン政権の支配が到来したことで一変したことを見事に描写していた。社会主義体制の崩壊とともに女性がブルカを着用し始めたり、非イスラム的な書籍を集めて全て焚書にしてしまう場面が非常に印象的だった。主人公のクド

ラットが強い感情を抱いた際に挟まるインド映画的な歌やアクションのシーンによって映像に起伏が生まれ、多少和らぎも生まれて、全体的にシリアスな物語であつたが集中して見ることができた。しかし、やってきたムジャヒディーンたちに監督官が射殺されてしまうシーンは紛争の無慈悲さやムジャヒディーンの残酷さを効果的に表現していると感じた。視聴前に行われた解説は非常に興味深かった。それによって、本編から読み取ることができた情報が増し、今なお続いているアフガニスタンでの紛争についてさらに知らなければならないと関心を持つことができた。

■ソ連との関わりについて描かれているところが興味深かったのと、最後は今のアフガニスタンを写し出しているかのようで驚きました。私もハリウッドファンですが、アフガニスタンでもヒンディー映画が愛されていることは知らなかったです。アミターブ・バッチャンの若い頃の映画、ハリウッド好きなら誰でもわかる、あの夢の再現みたいな歌のシーンも面白かったです。なかなか観る機会のない映画をまた是非オンラインで配信して下さい。

■アフガンとソ連の政治的関係については以前調べたこともあって若干知っておりましたが、市民生活の香りや現地の雰囲気のようなその場所特有の調べただけではわからない数多くのことをこの映画を通して学ぶことができました。そして、ソ連侵攻が残した傷や危うい情勢下に置かれた子供達の不安感のような、アフガンの日常の内に潜む影や儚さを感じさせるものだったと存じます。ラストにかけての書物を焼くシーンは政変によるイデオロギー変化の対応に迫られている人々の焦燥感が強く伝わるシーンでしたが、"今もアメリカの書物を慌てて焼いているのだろうか"と思わせるような、30年前のこととは思えない恐怖感を覚えました……。このような素晴らしい表現者が今もカブールにいらっしゃるということをお大変心配しており、一刻も早く脱出することを強く願っております。

■まずは、アフガニスタンの情勢が気になる今のタイミングで、このような機会が得られたことに感謝申し上げます。冒頭のハリウッド映画描写が、主人公の要所で登場する各感情(喜怒哀楽)を表象して進みながら娯楽作と

して突き抜けていく様に圧倒されました。はじめは微笑ましかった古き良きハリウッド演出のチープさが、描写を重ねるごとに相反して泣ける仕上がりに変化していく繰り返すと、カンフー映画のように訪れる唐突な終劇に、監督の怒りと反骨精神とそれでも失わない遊び心を見た気がします。冒頭の説明は半分ほど見逃してしまいましたが、それでも鑑賞の助けになりました。それでも、自分の歴史認識や勉強が不足していること、日本語や英語で得られるソースに偏っていて取りこぼしているものを実感しました。これからもこのような機会を逃さず、知識を増やしていけたらと思います。ありがとうございました。

■今までにあったアフガンのイメージと大きく異なっていたのが印象的でした。その時代に、女性たちはおしゃれをして歩き、子供たちはイスラムの教え以外の外国の文化に触れ、思っていた以上に自由が描かれていました。また、そんな中でもイメージ通りに描かれていたのが死が身近であるという描写でした。ファヤズの精神病棟入り(帰り道に落下などして頭を打った?勝手なイメージですがこういった事故多そうです。)、ハシブの不発弾(?)による事故死、と友人が次々と不幸に襲われ、アフガンで真っ当に寿命を全うできない不運・不条理さのようなものを描いていると感じました。(先進国にあるような無事故で安心・安全のイメージではなく、ふとしたことで命を失ってしまうような不運が身近にある)今のアフガニスタンの情勢もあり、この映画を今この時に触れられたこと、関係者様各位に本当に感謝いたします。政権が変わる前の子供達がどのような教育を受け、何を考えていたのか。未来を作る子供達がどのような教育を受けるのか。これからもさまざまな情報をキャッチし、注視していきたいと思います。

■とてもとても素晴らしい作品でした。なぜ「孤児院」を舞台にしたのか、その意味をずっと考えながら観ていたのですが、最後スーパーバイザーが「ここは孤児院だ!」と叫ぶところで、腑に落ちました。表と裏の両方が同時並行で進んでいるような映画というか、表では楽しい普通の日常場面も見せながら、裏では少しずつ暗い悲しい現実に向かって進んでいることを、ファヤズの発狂やハシブの死で少しずつ少しずつ出して見せていくという、その描き方が見事でした。さらに、それで映画が終わるのかと思っていたら、最後政権崩壊の場面で、少し

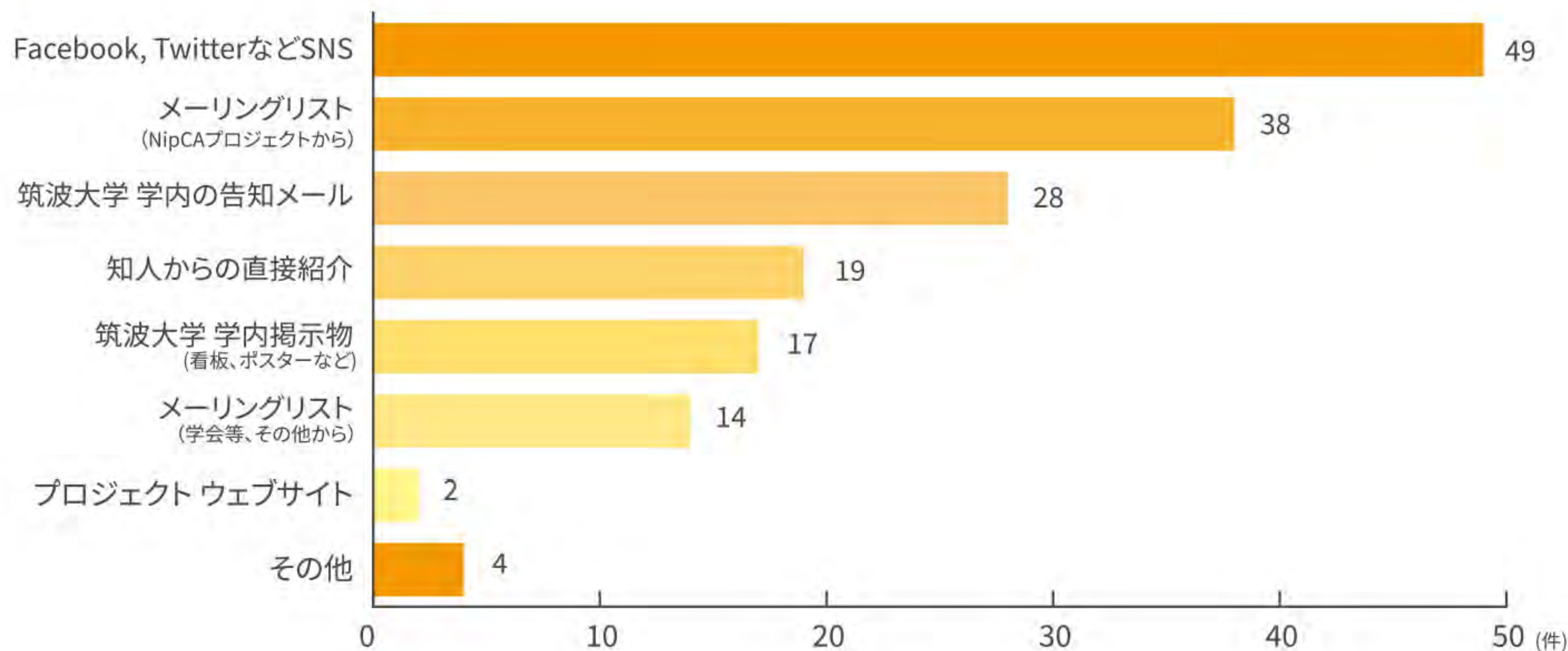
ずつ出されてきた裏側が表に出てきたというか、どんでん返しが起こったというか、その描き方も見事でした。まさに今のアフガニスタンイメージさせられるものでした。ただそれを最後決して暗く終わらせるのではなく、インド映画のヒーローとかぶせた孤児院の明るいヒーローでしめるという見せ方で、それでもまだ将来に希望はあるのだという気持ちを持たせてくれるような、そんな印象を受けました。それにしても映画に登場している皆さんの演技がとても自然で見事でした。ほんと見事な演出でした。「自由」が誰にも平等にあるわけではないこと、ある日突然自由が奪われることが起こりえるということをあらためて痛感させられました。そして時間を超えてまさに今アフガニスタンで起こっていることを伝えていることに、この映画の素晴らしさと重要性を感じます。解説があったおかげで、映画をより楽しむことができました。このような素晴らしい映画をご紹介いただきどうもありがとうございました。わたしの周りの人にも是非観てもらいたい映画であり、もしどこかで上映されるのであれば是非紹介したい映画です。

■ 実に興味深く面白い映画で、特にアフガン情勢が問題になっている今、この作品を観ることができてとても良かったです。このような機会を一般にも広く提供してくださった筑波大学、関係各位に心より感謝申し上げます。個人的なことですが、私は80年代半ばにパキスタンのイスラマバードに留学していて、当時は周囲にアフガン難民がたくさんいて、彼らと親しく付き合い、話を聞く機会も多かったのです。また、90年代末にはモスクワの外国人住宅に住んでいたのですが、上の階に旧政権のアフガン大使館員（祖国に帰れなくなってしまった人たちが）が住んでいて、やはり色々な話を聞きました。そんなわけで、何かと縁のあったアフガンにはずっと関心を持ち続けてきました。アフガンを扱った映画としてはモフセン・マフマルバル監督のタリバン政権下のドキュメンタリーなどを観てきましたが、2019年、女性監督によるこの新しい作品が、89年というソ連撤退期を取り上げていること、孤児たちの群像を一種型破りな手法（インド映画風のミュージカルパートの挿入など）で描いているのが新鮮でした。教室にはプーシキンの肖像画が掛かり、ピオネールキャンプに参加した後で、政権交代に慌ててソ連関係のもの（マヤコフスキーの詩集が象徴的）を焼き捨てるなど、米軍撤退期の今、観るといっそう感慨深いものがあります。あっさりと奪われる命、それに対する怒りの爆発で映画はプチ切れますが、こ

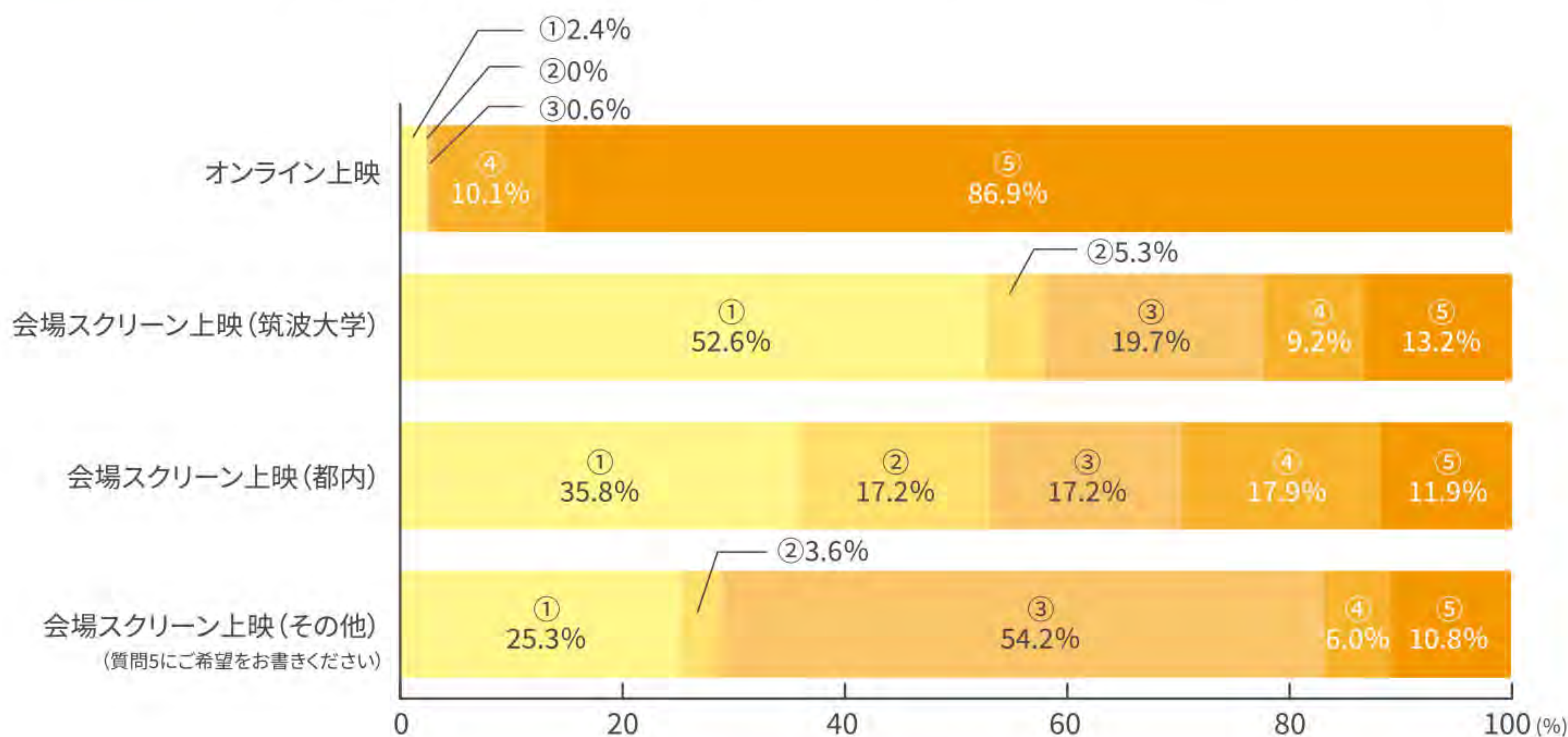
のラストはバックに流れる歌と共に最高だと思いました。ドキュメンタリー映画を超える「迫真」と観る人へのパンチがあると思いました。登場人物たちについてなど細かい感想を書くとキリがないので控えますが、とにかくいい作品で、日本で劇場公開されないのが残念です。言語的にも様々な言葉が入り乱れて面白く、特に私はウルドゥー・ヒンディー、ロシア語には馴染みがあるのでとても楽しかったです。多少はアフガンについて知っていたつもりでしたが、ダリー語がタジク語ととても近いことや、アフガンでのインド映画の人気、チェスにける思いなど、解説で初めて知ることも多く、大変勉強になりました。どうも有難うございました!!

■ このところ、筑波大卒業生のアフガンの友人たちから毎日しきりに悲痛な訴えが届き、何もできずに心が苦しいです。上映日には観ることができませんでしたが、なんといってもこのタイムリーな時期に、今のアフガンの状況そのものではない、アフガンの一面を観ることができ勉強になりました。歴史的に大国に翻弄されてきたと語られ、そのことは読み物などを追いきちんと理解せねばと思いますが、青年たちの生活、視線を通して触れることができ興味深かったです。危機的な状況に置かれる友人たちを助けることはできませんが、友人たちの状況について、無知であってはいけない、と思っているので、この映画を観ることができよかったです。

質問 3 今回のイベントは何で知りましたか



質問 4 今後参加を希望する上映会があった場合、開催形態についてのご希望を教えてください (① 参加したくない/できない ② あまり参加したくない ③ どちらともいえない ④ 参加できる ⑤ ぜひ参加したい)



質問 5 今回、または今後の映画上映会についてご意見・ご要望がございましたら、 ご自由にお書きください (上記質問4の「その他」の内容、開催日時、通信状況、映画視聴サイト、希望上映作品など)

希望上映作品

- 「狼と羊」
- 「アフガン発 貨物200便」
- シャフルバヌ・サダト監督の次回作が出ましたら、ぜひお願いしたいです。

■サダト監督の他の作品

■紛争などの中核となる地域に近い子供たちの様子を描いた話が観たいです。また、現状だけでなく、過去の紛争、事件などに目を向けた作品も観てみたいです。

■中央アジア、さらにコーカサス3国あたりの映画も見られると嬉しいです。

■この作品のような、中央アジアのあまり知られていない国の市民生活を描いた映画を見たい。

■アフガニスタン、クルド、ウイグルといった時代の変遷に翻弄される人たち自身がつくっている映画がみたいです。

クルドとウイグルは、個人的にもその文化に大きな関心があり、また彼らの置かれている状況については非常に危惧しています。日本では、日向史有監督のたいへん優れたドキュメンタリー映画『東京クルド』(2021)が公開され、在日クルド人がいかに過酷な立場に追いやられているかを、日本の入管(出入国在留管理庁)や難民申請の問題とともに明らかにしていました。映画上映というかたちで出来ることをしていきます。

■以前、こちらで紹介があったAykaをぜひ見てみたいです。

■なかなか一般に紹介されない映画を通して、社会を知る、生きていく人を知る機会をこれからもお願いします。ミニシアターでもいいので、全国の映画館で見られるようになるといいです。コロナ禍にあってはオンライン企画はありがたいです。地方ではあまり上映されないの。

この上映会を始めて驚いたことの1つに、毎回、地方の高校生が参加してくれているということがあります。文化施設が都市部に集中しがちな中、この上映会が少しでもたくさんの地方の方々に楽しんでいただければ嬉しいです。

■私は一般参加者なのですが、こうやって広く参加を募ってくださることがとても嬉しいです。参加料が多少あっても構いませんので、ぜひ継続して一般にも門戸を開いて頂けると嬉しいです。

有り難いお言葉ですが、大学のイベントですので、一般に門戸を開いたまま、今後も社会貢献活動の一環として無料で開催していきます。

■つくば市の文化度をアップ・アピールするためにも、大学内かつつくば市内で上映してほしい。ただし、今回のようなオンライン上映は、遠隔地の方でも参加できるのでとても意義があると思う。18時時点で300人参加というのは、すごい数字だと思う。非常に大きな文化的貢献だ。

■今回はオンライン上映会ということで小学生の息子と観ることができました。会場でとなると参加は少し難しいかもしれません。

■会場の場合、大阪/神戸での上映もしていただけると嬉しいです。

■より深く作品を理解する為に、試写会後に作品の内容に踏み込んだ解説(録画済みの動画等)が見られると嬉しいです。

第3回 オンラインによるロシア・中央アジア映画上映会

上映日 2022/2/4 [Fri]



タイトル キットボーイ

監督 フィリップ・ユーリエフ

脚本：フィリップ・ユーリエフ
 プロデューサー：アレクセイ・ウチーチェリ、キラ・サクサガンスカヤ、パーヴェル・ゴリン
 撮影：ミハイル・フルセヴィチ、ヤコフ・ミロンチェフ
 出演：ウラジーミル・オノホフ、クリスチーナ・アスムス、ウラジーミル・リュビムツェフ
 原題：Китобой
 製作年：2020年
 時間：93分
 製作国：ロシア
 言語：ロシア語、チュクチ語、英語
 日本語字幕：梶山祐治

ユーラシア極地の映像から考える貧困・格差・国境問題

梶山 祐治

— ユーラシア大陸の極地チュコトカとカムチャッカ

第3回上映会では、チュコトカ（チュクチ半島、チュコト半島）で撮られた初の劇映画、フィリップ・ユーリエフ『キットボーイ』（2020）を上映した。この作品の中身を具体的に見る前に、日本ではあまり馴染みのないこの地域について、まずは基本的な知識を踏まえておく。

映画の舞台となるチュコトカは、シベリア北東端にしてユーラシア大陸最東端に位置している【図1】。ロシア共和国領だが、行政上はチュクチ自治管区（州都：アナ

ディリ）内に位置する。人口はチュクチ自治管区全体でも5万人に満たない。民族はロシア人が多数派で、他にチュクチ、コリヤーク、チュヴァン、エヴェン、ユカギール、エスキモーなどさまざまな少数民族が居住する。夏でも平均気温は10度を超える程度で、1年のうち10カ月は冬と、その自然環境は極めて厳しい。アメリカ大陸最西端のプリンスオブウェールズ岬までは、わずか86kmの距離にある。

19世紀末以来、北海道や東北地方の多くの漁業者が豊富な漁業資源を求めてカムチャッカへ渡り、チュコトカに至るまでの沿岸部で漁業を行っていた。カムチャッカ半島のペトロパブロフスク市には、1920年代から40年代まで日本の領事館が置かれ、多い時には2万人以上の日本人が居住していたとされる。¹

言語に関しては、ソ連時代はレーニン主義的民族主義に沿って少数民族の言語の保護が進められていた時期もあったが、スターリンの一国社会主義を経て、ラテ



【図1】

1 永山ゆかり「カムチャッカ半島案内」ジュリア・フィリップス（井上里訳）『消失の惑星』早川書房、2021年、391-392頁。

ン文字からキリル文字への変換、ロシア語の母語化政策へと徐々に移行していった。² 古シベリア諸語の一つチュクチ・カムチャッカ語族は消滅の危機に瀕している。『キットボーイ』では年配の人間にはチュクチ語を話す者もいるが、若者たちはほとんど皆ロシア語を話している。

— カムチャッカとチュコトカの表象

今度は言語・文化的に近いカムチャッカとチュコトカを描いた文化作品を見ることで、この地域への理解を深めたい。はじめに紹介するのは、1989年生まれのアメリカーナジュリア・フィリップスのデビュー小説『消失の惑星』である【図2】。フィリップスは高校生の時からロシアに興味を持ち、バーナードカレッジでロシア文学を学び、モスクワに短期留学した。大学卒業後、ニューヨークにある非営利団体の犯罪被害者支援センター (Crime Victims Treatment Center) で働き、フルブライトの研究奨学金でカムチャッカ半島をリサーチするなどしながら、およそ10年の歳月をかけてカムチャッカを舞台にした小説を執筆した。

『消失の惑星』は、カムチャッカで幼い姉妹が失踪するところから物語が始まる。

活火山に貫かれているため陸の孤島となっているこの巨大な半島では、そこに住む人々の孤立感も深く、それもまたこの「惑星」に独特の影を差している。やがて姉妹の家族や最後の目撃者など、当初無関係だったこの地に生きる女性たちの言葉が次第に繋がっていくとき、冒頭の事

件が真実へ向けて少しずつ動き出していく。一見ミステリー風のこの小説が優れている点は、女性をはじめ弱者やマイノリティの<声>が丁寧に拾われている点にある。著者が彼女たちの<声>にそっと耳を傾ける姿勢には、犯罪被害者支援センターで働いていた経験は無関係ではないだろう。以下、小説の文章を2つ引用する。



【図2】

世間が決めたとおりに振る舞わなければ、警戒を怠れば、女たちは標的になる。隙を見せてはいけない。マーシャが無邪気に同性の恋人を作ったことが、ラダには信じがたかった。³

団員はすべて先住民族だ。エウェン人、コリヤーク人、イテリメン人、チュクチ人。黒い髪に茶色い瞳。「ぼーっとしてちゃだめだぞ」ルースランは言った。「そいつら絶対、おれの先住民のお姫様に言い寄ってくる」

クシューシャをそんなふうにからかっても許される白人はルースランだけだ。[中略]「どこから来たの？」授業がはじまる前にひとりの学生にたずねられた。「エッソ……」クシューシャが言いかけたとき、べつの学生がかぶせるように言った。「トナカイの群れから」周囲の学生はどっと笑った。⁴

1つ目の引用は、同性愛者であることをカミングアウトした幼なじみの友達に対しての苛立ちが込められている。カムチャッカを飛び出して都会のペテルブルクへ進学したマーシャは、地元の友達とも次第に疎遠になっていった。久しぶりに再会したとき、彼女は特に躊躇いもなくカミングアウトするのだ。だがそれは、偏見に満ちた極東の田舎町で、都会に出て旧友に冷淡になったと思われたマーシャが、実は性的マイノリティとしてどんなに生きづらい思いを抱えていたかが、明らかになる瞬間でもある。2つ目の引用は、ロシア人と付き合っている先住民族女性が周囲の学生に出身地を揶揄される場面である。ロシア人の彼氏は彼女を拘束しがちで、彼女は先住民族と女性という劣位に二重に置かれている。『消失の惑星』はこうしてさまざまなマイノリティの声を可視化し、その声に寄り添った小説である。

それではチュコトカを描いた作品にはどういったものがあるのだろうか。ソ連時代の作品になるが、アニメーションと文学にそれぞれ代表的な作品がある。ミハイル・アルダシンとペエプ・ペドマンソが監督した『ケレ』(1988)は、チュコトカの民話を下敷きにした作品である。伝統的な集落に住む幼い少女たちがベリーを摘んでいると、悪霊ケレの笛に誘い出されて捕まるが、鳥の助けを借りて逃れ、無事帰宅するという10分ばかりのアニ

2 呉人徳司、呉人恵『探検言語学：ことばの森に分け入る』北海道大学出版会、2014年、231頁。

3 ジュリア・フィリップス『消失の惑星』、159頁。

4 同書、98頁。

メーションである。興味深いのが、冒頭、ソ連の国章らしきマークを腹部に確認できるヘリコプターが、集落を飛び立って行くのが映り込んでいるところである【図3】。ソ連の辺境への目配りを示すものであると同時に、大地が厚い岩石に覆われているチュコトカにあって、空路が確実な輸送手段であることも示している。『キットボーイ』においても、陸の孤島であるからこそ、主人公の少年の疎外感は強くなっていくのだ。



【図3】

もう1つは、チュクチから出てきた初の作家ユーリー・リイトヘウ(1930-2008)の小説『クジラの消えた日』である【図4】。文字を持たなかったチュクチの人々が口承で伝えてきた創世神話で、クジラのリョウと人間の女性ナウが結ばれる様子が官能的に描写されている。



【図4】

リョウと一緒にになりたい。
リョウと一つになりたい。
強い欲望だった。心に痛みすら感じる。しばらくの間、痛みはナウの心を覆いつくし、心の外に破り出ようとしていた。けれども、痛みが心の外に出ることはなかった。
叫びたい。叫び声をあげたい。
うめき声がナウの胸の内から迸り出ようとしていた。しかし、このときナウは知らなかった。……まだ、知らなかった。この気持ちこそ、女の最高の幸せであることを。
この感情こそ、音楽の源であり、思いやりと新たな生命の源であることを……。

クジラの潮が波と空気を突き破り、空へと放たれた。
ナウはその音を耳にした。……リ、リ、リーーヨーウ!⁵

クジラはチュクチの創生に関わる生き物であり、チュコトカにおけるこの動物の重要性がわかる。

現代のチュコトカで、クジラは寒冷で過酷な環境下で暮らすチュクチの人々の胃袋を満たす存在である。「捕鯨船(英: whaler boy / 露: китобой)」【図5】を意味する映画『キットボーイ』は、クジラを糧として生きるチュクチの人々の現代における生活を映し出す。老人たちは若者がクジラ漁で獲ったその肉を待ち侘びており、海岸では少年たちが食べられないためその場で廃棄されたクジラの腸と戯れている【図6】。都市部から取り残されたかのようなユーラシア大陸東端の漁村で、クジラの神話性は解体されて、文字通りチュクチの人々の生きる糧となっている。



【図5】



【図6】

— チュコトカで撮られた初の劇映画、フィリップ・ユーリエフ『キットボーイ』(2020)

フィリップ・ユーリエフは、1990年、モスクワに生まれた【図7】。VGIK(全ロシア国立映画大学)卒業後、ユーラシア大陸最東端の漁村におよそ7年間住み込んで完成させた長編第1作が『キットボーイ』である。ロシアの著名な映画評論家アントン・ドーリンは、この

5 ユーリー・リイトヘウ(浅見昇吾訳)『クジラの消えた日』青山出版社、1998年、17-18頁。

作品を以下のように評している。



【図7】

この映画がまた思い起こさせるのは、ロシアはモスクワ、ペテルブルク、その周辺から構成されているわけではなく、そこで話されているのはロシア語だけでない、国は広大で、実に様々な文化、宗教、言語に満ちているということだ。そして彼らは皆、映画が自分たちにスクリーン上で命を与えてくれる機会を辛抱強く待っているのだ。ソ連の多くの人にとって、チュクチはもっぱらウムカの小唄やアニメの、時として小バカにしたカリカチュアである主人公だった。『キットボーイ』は古びたステレオタイプに抗っている[後略]。⁶

ウムカとは、ウラジーミル・ポポフとウラジーミル・ペカリの共同監督による、ソ連時代に人気のあったアニメ『ウムカ』(1969)のシロクマのことである【図8】。『キットボーイ』が映し出すのはすでに50年前に制作されたアニ



【図8】

メとは違った、ソ連解体後、あたかも取り残されたかのように生きるチュクチの実際の姿である。たとえば、【図9】は、北極航路に位置するこの地に船が廃棄していった多数のドラム缶で、チュコトカの問題がさり気なく示されている。ドーリン曰く「ステレオタイプに抗った」、すぐれて今を伝える映像を支えているのが、実際に現地に住むチュクチの人々である。特にこの作品で映画デビューし主役を演じたチュクチの青年は、素晴らしい演技を披露している。青年リョーシカはパソコンで



【図9】

デトロイトに住むアメリカ人女性Hollysweet_999とライブセックスカメラで繋がり、無垢な彼は彼女も自分を愛していると信じ込んで、目と鼻の先にあるアメリカへと渡って彼女に会いたい思いを募らせて行く【図10】。直線でわずか86kmしか離れていない両国を隔てる海を直接渡することはもちろん禁じられているのだが【図11】、その想いを抑えきれなくなった彼は、Hollysweet_999をめぐって親友と大げんかし、密航を企てるのである。



【図10】



【図11】

この時リョーシカは、壁にかかった地図を剥がしてチュコトカからアメリカへ向かって1本の線を引く象徴的な動作をする【図12】。この地図上のロシアの地名はソ連



【図12】

6 「キットボーイ」： подросток с Чукотки решает переплыть Берингов пролив, чтобы увидеть свою любовь в Детройте. Фильм дебютанта Филиппа Юрьева наградили в Венеции
[<https://meduza.io/feature/2020/09/16/kitoboy-podrostok-s-chukotki-reshaet-pereplyt-beringov-proliv-chtoby-uvidet-svoyu-lyubov-v-detroyte>]

のままであり、こうした細かいところからも、この地の時間はあたかも止まっている＝進歩していないかのように演出されている。なお、チャット相手のアメリカ人女性を演じているのは多くの映画出演作をもつロシア人のクリスティーナ・アスムスで、現地のチュクチの人々をメインにキャスティングしたこの映画にあって、ほとんど唯一のプロの役者である。

【図13】は映画の中に登場する地図である。真ん中を日付変更線が貫き、ロシアとアメリカを隔てている。地図にはラヴレンチャやプロヴィデニヤという地名が確認できる。これらの街はチュコトカにあって比較的大きな人口を抱えているが、それでもラヴレンチャの人口は1,143人(2021年調べ、以下同)、プロヴィデニヤの人口は2,141人である。後者は空港を有し、北極の玄関口としてアラスカから観光客も訪れていた。『キットボーイ』が撮影されたのはロリノという人口971人の漁村で、ラヴレンチャの少し南に位置している。地図にはチュクチ自治管区の行政中心都市アナディリ(人口15,240人)も確認できるが、ロリノやラヴレンチャから陸路で行くのは悪路のためほとんど不可能である。『ケレ』の冒頭でヘリコプターが描かれていたのは、こうした地理的な要因もある。



【図13】

『キットボーイ』で密航を試みたリョーシカは航路を見失い、ある島にたどり着く。この島がベーリング海峡の中間に位置するダイオミード諸島で、日付変更線が島を二分し、リトルダイオミード島(別名「昨日島」、アメリカ領)とラトマノフ島(別名「明日島」、ロシア領)という2つの島から成っている。リョーシカがたどり着いたのは、ロシア人の密猟者に遭遇し(そもそもロシア人が東方に進出したのは毛皮を求めたからだ)、その後、アメリカの国境警備隊にも見つかっていることから、日付変更線の向こう側にあるリトルダイオミード島だと推測される。

国境警備隊に本土に連れてってやると船に寄せられたリョーシカだが、降りた地点からいくら歩いても街は見えてこない。疲れ果てた彼は、幻聴のようなクジラの鳴き声を聞く。その音に導かれるように辿り着いたクジラの骨が集まっているところで【図14】、「アメリカはもう



【図14】

十分だ」と呟いた次の瞬間、彼は見慣れた故郷の近くにすでに戻ってきている。リョーシカが降ろされた場所がアメリカなのかロシアなのかは意見が分かれるところかもしれないが、現実^に即した見方をすれば、アメリカの国境警備隊が大人の対応で問題が大きくならないよう、そっとロシアの土地に還したというふうに考えられるだろう。确实なのは、たとえロシアの極東の大地と実質ほとんど変わらない土地だったとしても、実際にリョーシカはアメリカの土を踏み、アメリカ人がするように焚き火でマシュマロを焼いて食べた(その味は彼にとってとても食べられたものではなかった)ということである。そのためか、ラストシーンで親友と仲直りして肩を組みながら彼が見せる笑顔は、少し分別がついたかのように迷いのない表情を見せているのだ。

第3回 映画上映会アンケート

— 回答数 147件 / 参加者数 349名
申込者数 505名

質問 1 今回の上映作品『キットボーイ』はいかがでしたか？



評価平均 4.38 (5段階評価)

質問 2 作品・解説についてのコメント・評価

■普段知ることが難しいロシア-アメリカ国境地帯を舞台にした作品鑑賞の機会をいただきありがとうございました。全体的に画面が暗めの映画だったので視覚的には少しみづらい印象もありましたが、主人公が外の世界に興味を持つ思春期の少年という普遍的な設定で理解しやすく、ストーリーを集中してみることができました。(本筋には関係ありませんが、ヴァレーニエの入ったビンがすごく大きかったのが印象に残りました。)事前解説で紹介された小説も今度読んでみたいと思います。またチャットのリンクで紹介いただいたYouTubeの動画2本も後日みてみたいと思います。

■スポットライトの当たらない町の暮らしぶりを垣間見ることができて面白かったです。おじいさんがとってもチャーミングでしたが、その反面で身近に死を匂わせていて...作品の世界に奥行きが出ていたように思います。

■面白かったです。以前に「How I ended this summer」を見たことがありましたが、それと同じような逃げ場のない辺境感と緊張感がありました。1点、国境のアメリカ警察がロシア人をロシアに還すために領海侵入するのはOKなのか？と疑問に思っていました。

■すごく面白かったです。ロシア映画＝NHKロシア語講座に出てくるロシア＝金髪白い肌と思い込みがあったのですが、広いロシアには多くの社会と文化背景の人が住み、言葉も異なり、でも、昔と違ってネットのおかげで、別の国の生活を見ることだけはできる。そんなまさしく今の都会以外に住む若者の生活や思いを見ることができ、面白かったです。居住地(岐阜)では毎年アジ

ア映画祭というイベントがあり、普段目にすることのないアジアの映画を観ることができて毎年楽しみなのですが、もっと広い別の世界も知りたくなりました。来年もぜひ観たいです。しかし最後の結末が、自分の中ではまだ未消化、わからない。アラスカに渡ったのが夢なのか？故郷の村に帰り友人も無事だったのが夢なのか？観た後、同じ映画を観た人と語りあいたいと思います。

■上演前の梶山氏の解説が、作品の理解を深めることをとても助けてくれた。作品について、途中であまりに切なくなり観ることを諦めようかと思いましたが、最後まで映画を鑑賞することができ、新しい世界観を感じました。主人公の少年の言葉「アメリカはもう十分だ」というセリフがとても胸に響きました。私たち民主主義の国々の人々も同じことを感じている人がいると思います。少年の無垢な顔がとても美しいと思いました。ありがとうございました。

■大変面白かったです。ジョン万次郎というと古すぎるかもしれませんが、このようにしてアメリカ大陸に行っただろうと思いながら、少年の幸運を祈りつつ観ていましたが、最後は元の町に戻っているので、びっくりしました。でも少年が明るい顔になっていたのほっとしました。このような生活をしていれば、SDGsとか、カーボンゼロなど必要なく、先進国の生活がいかに過剰にエネルギーや物質を消費しているのかを強く感じました。先進国は人間の理性を働かせてここまで来て、これからどこまで行くのだらうと思いました。いろいろ考えさせていただきました。貧困がテーマのひとつということで、少しずれた感想になってしまいました。ありがとうございました。

■貴重な映画を観る機会をいただきありがとうございました。興味深く拝見しました。どんなラストになるのか想像が付きませんでした。バッドエンドでなくてホッとしました。全体を通して彩度の低い画面から主人公の少年の心細さ・孤独感や閉塞感が伝わってきて、没入感の高い作品でした。コロナ禍で旅行をしなくなってからgooglemapなどで海外の地図を見ることが増えたのですが、その中でもとりわけ興味をひかれたのがこのチュコトカでした。都市部と違って詳細なストリートビューも鮮明な衛星写真もない沿岸の村はどんな様子なのだろうと思っていたところに『キットボーイ』の上映会があることを知りました。想像以上に地理的に隔絶された暮らしぶりが印象に残りました。日本も国境問題を抱える国ですが、国境を越えてくる側の切実な願いに思いを寄せることはあまりなかったことに気づきました。ロシア語は少ししかわからないのですが、チュコトカについてもっと知ることができるメディアや書籍などがあれば引き続き追ってみたいです。

■少年の表情がリアルでまるでドキュメンタリーを見ているかのようでした、、、最後無事に帰ったのか？友達は無事だったのか？混乱しました。(それだけ感情移入していました。)彼らの生活は今どうなっているのか、気になりました。クジラを解体してそれを売るしか収入源がない地域に生まれてしまったら、、、またインターネットという外部と繋がるツールがあったら、卑屈になってしまいその土地でたくましく生きることが私にできるだろうかと思いました。何もかもが制限されている地域で生きること、考えさせられました。またロシア＝目の青い人というイメージがありましたが、彼らはどちらかと言えば日本人のような顔つきをしており、ロシアにも多様性があるのだと知れました。

■チュクチという場所を、そこで生きる人々を初めて知った。人工物が必要最低限しか存在しない風景の中で、「人」と「生きる糧であるクジラ」、ふたつの生命が浮かび上がる。その生命の輪郭は、私の生活の中ではありえないほどはっきりと輝いて見えた。こんなにも私とは異なる環境の中でも、思春期の少年の心模様はいずれも同じ。恋心、嫉妬、憧れ、友情、諦め、悟り・・・周囲の大人に見守られながら、心身の痛みを伴いつつ成長していく様は、ある意味安心感を感じる。一方、チュクチと例えばデトロイトというあらゆる意味で異なる場所に、

インターネットというものが等しく入り込んでいることに違和感と多少の暴力的なものを感じた。貴重な映画とのご縁をいただき、ありがとうございました。

■とにかく怖い映画だった。最後、アラスカから故郷に還った描写は主人公の青年の夢(または走馬灯)なのだったと思ったが、他の視聴者がどう解釈したか知りたい。主人公は、今までの映画や私自身も持っていた僻地に暮らす人々のステレオタイプにはまる人物ではなかった。牧歌的な地で穏やかに暮らしを送るだけの人間ではなく、自分の気持ちを言葉にするのが下手で、内向的でカッとなりやすく、今の暮らしに閉塞感を感じている。そして恐ろしいことに、国境警備隊のアメリカ人に助けられアラスカに到着したときに、友達を殺してしまったことを全く忘れていたかのように無邪気に笑っている(自分ではどうにもできない過酷な状況で、精神の安定を保てずハイになっているのだと思うが)ような面もあり、決して好人物とは言えない。だが、そんな青年が主人公になることで、外部の作り手によって画一的に描かれてきた彼らの多面性や多様性を浮き彫りにしていると思う。そして、明らかに英語を理解していない主人公に英語で話し続ける国境警備のアメリカ人の存在が、主人公の閉塞感の正体でもあり私(視聴者)の差別意識を投影した存在だと思った。アメリカ人が少年に飛行機のことを「空を飛ぶ大きな鳥」と説明しているのは、少年からすれば自分たちの暮らしを馬鹿にする行為だし、そもそも言葉が分からないだけで能力が低い人間として接することは相手への敬意に欠けている。だが、我が身を振り返ると、まだ日本語が不自由な留学生や、アルバイト先に来た外国人観光客に対して、どこかこちらが世話をしてあげる、何もできないであろう人たちを助けてあげるという意識があることを全否定できない。そんな自分の差別意識や優性意識を常に忘れず、反省しながら日々を送りたいと思った。そして自分の妄想だが、もしあの島で少年が国境警備隊の英語をもう少し理解できていたら、きっと怒りで相手を殺したり逆に殺されたりしただろうと思うので、皮肉だが少年がああ場で英語を理解できなくてよかったと思った。

■COVID19が蔓延して以降、オンラインミーティングはこれまでと比べ物にならないほど、身近なものとなった。先生や学友あるいは飲み友達など、モニターの向こう側にいる相手に、私たちは部屋の中で小さなモニ

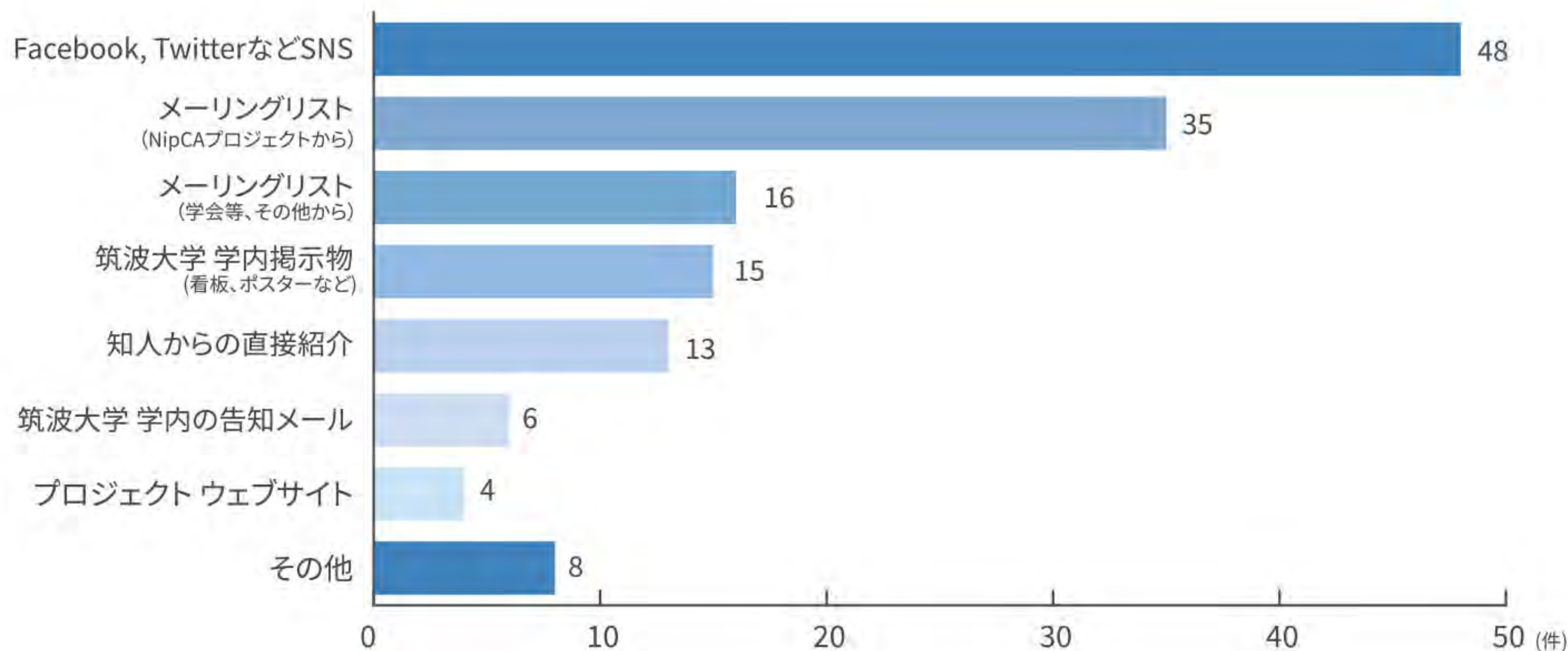
ター越しに何とか繋がろうとしている。本作の主人公もまた、モニターの向こうにいる相手にぞっこんになっている。尤も、本作はモニターの向こう側から始まる、ということもまた重要である。カメラとともに私たちは国境を自由に飛び越えて、彼の知らないモニターの向こう側の世界を知っている。だから彼の行動を滑稽なように思ってしまうのだが、普段の自分たちの懸命なオンラインミーティングの様子を思い返してみれば、彼の突き動かされる必死さを嗤うことなどできないようにも思う。村でのクジラ漁のシーンは圧巻だった。何隻もの小舟で巨大なクジラに向かう姿は、人間が集団で力を合わせねば暮らしていけない生活の一端を垣間見ると同時に、映像的なスペクタクルも満点だったといえよう。しかし、来る日も来る日もクジラを捕ってそれを分配して、またクジラを捕って...という繰り返しの、青年がインターネットの向こうを希望をもって見つめる気持ちもまた、理解できる。

それでもこの村でも生活があり、どこからか女性が来たりダンスホールがあつたりと、日々の暮らしは続いていく。重要なのは折り合いであり、それがこの地でどうしてもつけられなければ、青年たちは出ていくしかない。不思議なのは、このチュコトカの人々がモスクワではなくアメリカに行く、ということだが、ロシア国内の移動もまた難しいのだろうか。モスクワも煌びやかだしロシア語が通じる。そしてなにより距離は遠くとも国境を超えるより安全に行けそうなものではあるが...。貴重な美しい映像、きれいな音、練られた脚本に良い芝居。大変素晴らしい映画でした。ご紹介、ご企画くださって本当にありがとうございました。

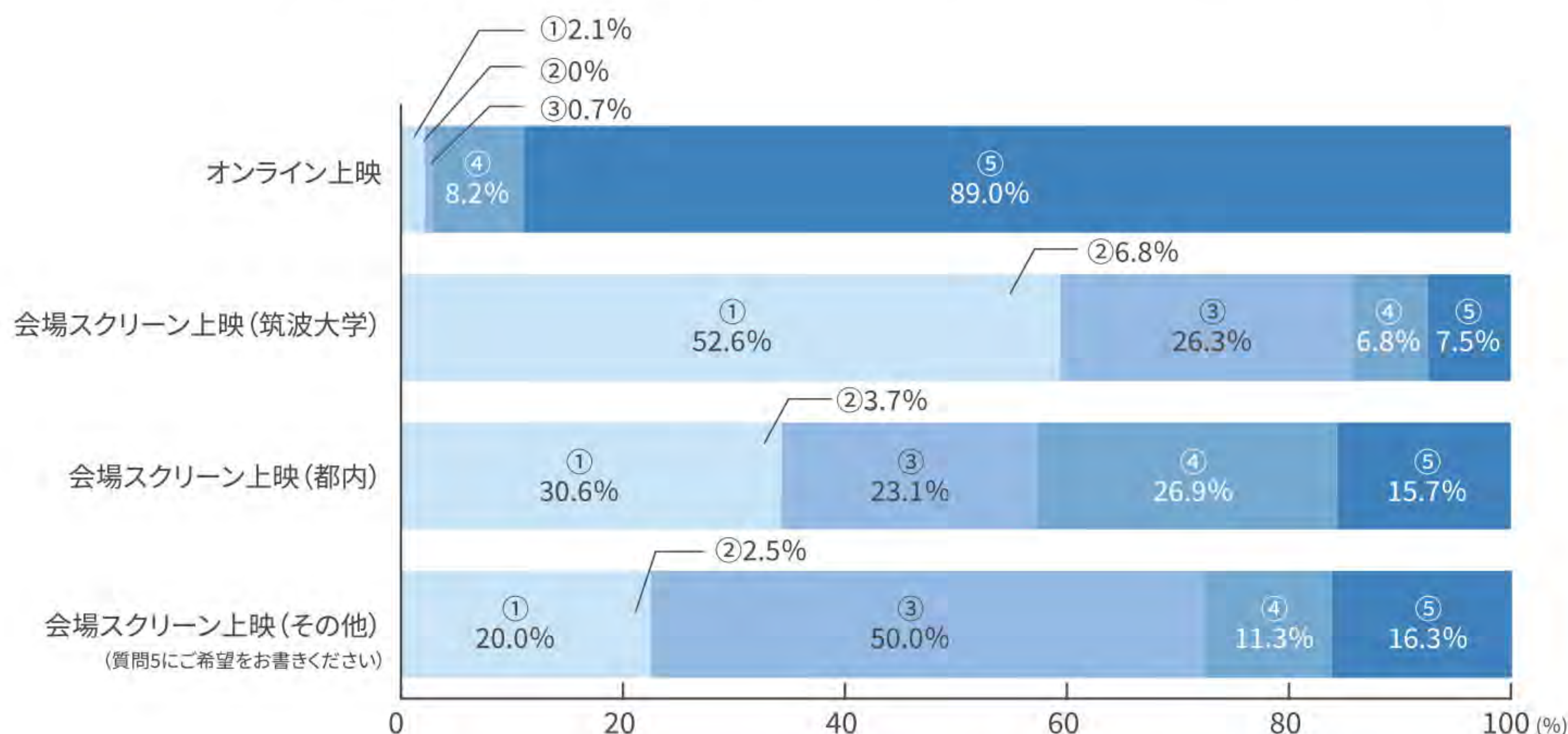
■現実と主観的幻想の境界が非常に曖昧で、青年と言うより、本当に少年と表現すべき無知と幼児性。同じ環境で育ちながらインターネット通信やウェブカメラといったテクノロジーや、ポルノチャットの背景にある経済システムを理解できない主人公と、それがあくまで見世物に過ぎない事は理解しつつも、それを上手に言語化して伝達することができていない友人。ロシア系と少数民族系との間で元々の文化資本に差があるのか、或いは西欧文明との心理的距離感が生み出した科学的思考の欠損故なのかでしょうか。ラストベルトの中心地として経済的苦境と治安の悪化に悩まされる現実のデトロイト、その一角で底辺のポルノキャストとしてチップを稼いで暮らす999、その999とデトロイトにあらぬ幻想を膨らませた挙句に暴走する主人公の対比は、誤変

換を繰り返して文法がめちゃくちゃになったテキストの羅列のよう。ITやグローバル化への皮肉を感じました。

質問 3 今回のイベントは何で知りましたか



質問 4 今後参加を希望する上映会があった場合、開催形態についてのご希望を教えてください (① 参加したくない/できない ② あまり参加したくない ③ どちらともいえない ④ 参加できる ⑤ ぜひ参加したい)



質問 5 今回、または今後の映画上映会についてご意見・ご要望がございましたら、 ご自由にお書きください (上記質問4の「その他」の内容、開催日時、通信状況、映画視聴サイト、希望上映作品など)

希望上映作品

- ロシア語圏の作品をどんどん取り上げていただければ嬉しく存じます。
- 正教の文化圏での映画は、異性間や女性同士の問題よりは男性同士の恋愛がもっとも珍しいと思います。
YouTubeなどでは鑑賞できないそうした作品を鑑賞したいし、先生方の解説をたくさん聞きたいです。

コロナ禍なのでオンライン上映、ロシア文化圏の芸術表現とジェンダーについてオンライン講演があったらぜひ参加したい。ご多忙のなか先生方が素晴らしい企画に尽力してくださって心から感謝しています。

■日本でまだ上映されていない、一般的に日本にはなじみの少ない地域の映画を上映していただきたいです。

本上映会は、日本未公開作品を上映するという点にこだわっています。正直なところ、日本人には馴染みのないチュコトカを舞台にした『キットボーイ』を劇場でかけるのは、集客面を考えると難しいかもしれません。それでも、日本の配給には引っかからない『キットボーイ』のような素晴らしい作品はたくさんあります。こうした映画に光を当てることは、採算をあまり考慮しなくて良い大学主催の上映会だからこそやり易いところがあり、この強みを活かして、さまざまな地域の映画を上映していく予定です。

■オンライン上映がいちばん参加しやすいので今後もこの方法で開催していただけると嬉しいです。今回の曜日と時間帯は最も都合があうスケジュールでうれしかったです。会場上映は開催場所と曜日・時間によっては参加可能ですが、第一希望はオンラインです。中央アジア各国の作品にも興味があるのでそれらも上映の機会があると嬉しいです。

■ULIZAによる配信は画質も良く、通信状態も問題発生しないので良いと思います。

■このような形態が続けばありがたいです。無料で参加させていただいていますが、有料でも参加したいです。

■開始前のミニ講義が大変興味深く、しばらくの期間だけでも見返したり、プラスアルファのお話を伺える動画等あれば拝聴したいです。1コマ分ほどで3,000円以内ほどであれば、より有り難いです。また、映画自体にも鑑賞料金があっても良い気がします。この度は貴重な機会をありがとうございました。

■これまで、中央アジアに関する作品を多く紹介していただいた。また、昨年末の「中央アジア今昔映画祭」の開催など、プレゼンターの梶山祐治氏の映画や現地文化のご見識から学ぶことが多くあった。露宇間の政治的緊張が今日の心配事ではあるが、普段、日本の映画興行では紹介されることの少ないCIS/NIS圏の映画情報や社会への関心を深める試みを、映画・文学・社会紹

介のオンラインレクチャーで開催していただきたいと思うし、もし、自分にでもお手伝いできることがあれば参加したいと思う。また、機会があれば、さきの映画祭のように全国巡回の機会があれば良いのではないかと考えている。それによって、NipCAの取り組みや、筑波大学の国際文化貢献への興味・関心と呼ぶことができれば、(少し大袈裟かもしれないが...) 外交とは別ルートの文化やアカデミアを軸とした新たな民間外交の糸口を見出すことができるのではないかと考えられるからである。今後のNipCAの取り組みにぜひ期待したい。

■ぜひオンライン上映会でお願いします! 解説も素晴らしく、有難かったです。またZOOM上映でなくプラットフォームでの上映で画質も音質も良い状態で鑑賞でき、感激しました。お願いですが、できたら、TwitterなどSNSで一般向け告知をもっとしていただけたら嬉しいです。今回は本当に偶然に知り参加することで、全く知らなかったこの地域について学ぶことができて嬉しかったです。どうぞよろしくお願いいたします。

■18時~20時だと、ちょうど帰宅の電車の乗っている時間なので、この映画を電車の車内で見るのは難しかった。オンデマンド式で大変よかった。代替の上映会場としては、ロシア大使館、東京都写真美術館などであつたうれしい。

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催
「オンラインによるロシア・中央アジア映画上映会」
第1～3回上映会 報告書

2022年9月20日

監 修	臼山 利信
編集・校正	梶山 祐治 (主担当)、山本 祐規子、谷越 祥子、太田 涼子
発 行 者	臼山 利信
発 行 所	筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」 茨城県つくば市天王台1-1-1 Tel 029-853-4251 E-Mail info@genius.jinsha.tsukuba.ac.jp Web https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/
印刷・製本	株式会社パルデザイン



筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学

Tel. 029-853-4251

E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp

Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp>